

6 コンクリート工事

① コンクリートの種類等 (6.2.1)

② セメント (6.3.1)

③ 骨材 (6.3.1)

④ 混和材料 (6.3.1)

⑤ 打継ぎの位置、ひび割れ誘発目地、打継ぎ目地 (6.6.4)

⑥ 温潤養生 (6.7.2)

⑦ コンクリートの仕上り (6.2.5) (6.8.2)

⑧ 打増し厚さ (打放し仕上げ部) (6.8.1)

⑨ 型枠 (6.8.2)

10 軽量コンクリート (6.10.1, 2)

11 寒中コンクリート (6.11.1, 2)

⑫ 暑中コンクリート (6.12.2)

13 マスコンクリート (6.13.1, 2)

⑭ 無筋コンクリート (6.14.1)

⑮ コンクリートの単位水量測定

7 鉄骨工事

① 鉄骨製作工場 (7.1.3)

② 施工管理技術者 (7.1.3, 4)

③ 鋼材 (7.2.1)

④ 高力ボルト (7.2.2)

⑤ 普通ボルト (7.2.3) (7.5.2)

⑥ アンカーボルト (7.2.4) (7.10.3)

⑦ 溶接材料 (7.2.5)

⑧ ターンバックル (7.2.6)

9 床構造用のデッキプレート (7.2.7) (7.7.8)

鉄骨部材への溶接方法

10 スタッド

⑪ 柱底均しモルタル (7.2.9)

⑫ 製作精度 (7.3.3)

13 溶接技師の技量付加試験 (7.6.3)

⑬ 溶接接合 (7.6.4)

⑭ 入熱、パス間温度の管理 (7.6.12)

⑮ 溶接部の試験 (7.8.2)

⑯ 錆止め塗装 (7.8.4)

18 耐火被覆 (7.9.2~8)

⑰ 建方精度 (7.10.2)

⑱ アンカーボルト等の設置 (7.10.3)

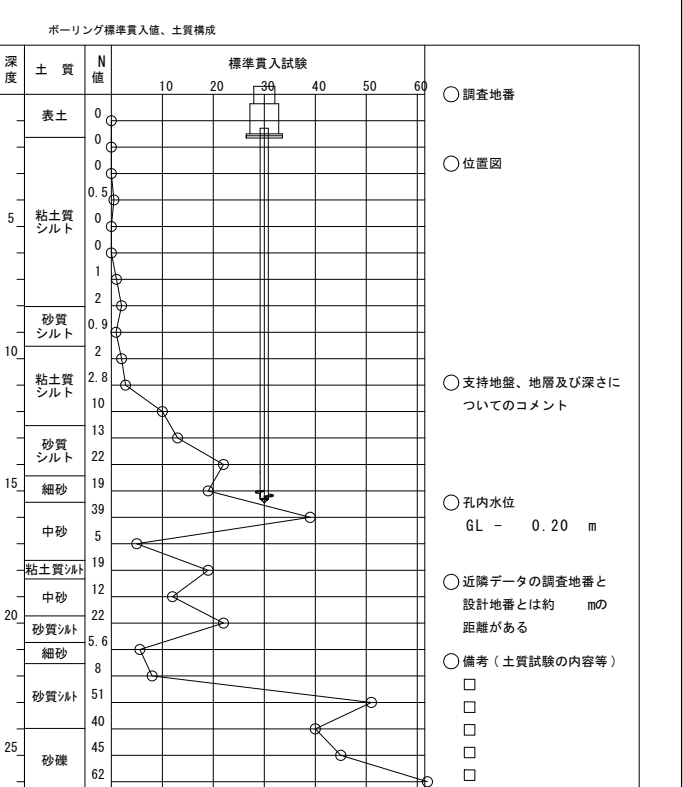
21 溶融垂鉛めつき (7.12.4) (表14.2.2)

22 梁貫通孔の補強

8 その他

① 設備関連

敷地内ボーリングデータ



注) 地盤調査及び試験杭の結果により、杭長さ、杭種、直接基礎の深さ、形状を変更する場合もある。

構造関係共通図（配筋標準図）

総則

- 適用範囲
 - 本構造関係共通図は鉄筋コンクリート及び鉄骨鉄筋コンクリート造等における鉄筋の加工、組立の一般的な標準図とする。
 - 本構造関係共通図以外については、設計図及び監督員の指示による。

- 用語の定義
 - 設計図とは、建築構造のうち特記仕様書（構造関係）、構造関係共通図以外の図面をいう。
 - 異形鉄筋の径（本文、図、表において「d」で示す。）は、呼び名に用いた数値とする。
 - 長さ、厚さの単位は、特記なき限りmmとする。

- 優先順位
 - 設計図書の図面のうち配筋方法に相違がある場合の優先順位は以下のとおりとする。
 - 特記仕様書（構造関係）
 - 図面
 - 2-1 設計図
 - 2-2 構造関係共通図（配筋標準図）
 - 国土交通省大臣官房官庁営繕部監修「公共建築工事標準仕様書（建築工事編）（令和4年版）」

- 記号

図面中使用する記号等は、表A～表Dを標準とする。

表A 異形鉄筋の断面表示記号

区分	径	D10	D13	D16	D19	D22	D25	D29	D32
建築		●	×	○	●	○	○	⊗	⊙

表B 各階伏図における記号

記号	説明	記号	説明
S*	スラブの配筋種別	⊕	杭の位置
◇	スラブ厚さ	+	試験杭の位置
○	階段の配筋種別	▨	打増しの範囲
○○	土間コンクリート	⊠	スラブ開口
□	コンクリートブロック壁（CB壁）	⊕	ポーリング位置
▨	梁・スラブの上がり下がり範囲	(土)	FLからの上がり下がり
EW○○	耐力壁の種別	W○○	一般壁の種別
EW○○○	片持ちスラブ形階段を受け、かつ耐力壁の種別	KW○○○	片持ちスラブ形階段を受け、かつ一般壁の種別
ERW○○	土圧を受け、かつ耐力壁の種別		

表C 梁貫通孔記号

区分	径	50	75	100	125	150	175	200	225	250	275	300	325	350	375	400
建築		○	×	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+

表D スリーブ材質の凡例

管名	鋼管	溶融亜鉛めっき鋼板	硬質塩化ビニル管（薄肉管）	つば付き鋼管（黒管）
記号（建築用）	SP（白管）	GA	VU	RS

※建築用以外のスリーブ材質は各工事による。

1 鉄筋の加工

鉄筋の折曲げ内法直径は、表1.1を標準とする。

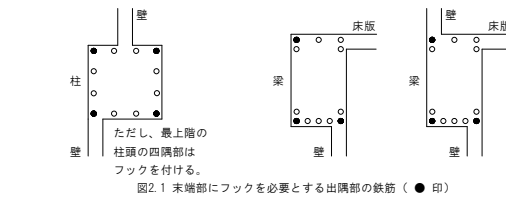
表1.1 鉄筋の折曲げ内法直径

折曲げ角度	折曲げ図（余長）	折曲げ内法直径(D)		
		S0295A S0295B、S0345	S0390	
		D16以下	D19～D38	D19～D38
180°				4d以上
135°				6d以上
90°		3d以上	4d以上	5d以上
135°及び90° （折止め筋）				4d以上

- 片持ちスラブ先端、壁筋の自由端側の先端で90°フックまたは135°フックを用いる場合は、余長は4d以上とする。
- 90°未満の折曲げの内法直径は特記による。

2 異形鉄筋の末端部

次の部分に使用する異形鉄筋の末端部にはフックを付ける。
(1) 柱及び梁（基礎梁を除く）の出隅部



- 煙突の鉄筋（壁の一部となる場合を含む）
- 杭基礎のベース筋
- 帯筋、あばら筋及び幅止め筋

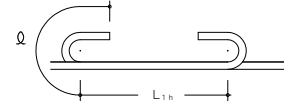
3 継手及び定着

- 鉄筋の重ね継手
 - 径が異なる鉄筋の重ね継手の長さは、細い鉄筋の径による。
 - 柱及び梁主筋並びに耐力壁を除く鉄筋の重ね継手の長さは、表3.1による。

表3.1 鉄筋の重ね継手の長さ

鉄筋の種類	コンクリートの設計基準強度 Fc (N/mm ²)	L ₁ (フックなし)		L _{1h} (フックあり)	
		小梁	スラブ	小梁	スラブ
S0295	18	45d	35d	35d	30d
	21	40d	30d	30d	25d
	24, 27	35d	25d	25d	20d
	30, 33, 36	35d	25d	25d	20d
S0345	18	50d	40d	40d	30d
	21	45d	30d	30d	25d
	24, 27	40d	30d	30d	25d
	30, 33, 36	35d	25d	25d	20d
S0390	21	50d	35d	35d	30d
	24, 27	45d	30d	30d	25d
	30, 33, 36	40d	25d	25d	20d

1. L₁、L_{1h}: フックなし重ね継手の長さ及びフックあり重ね継手の長さ。
2. フックありの場合のL_{1h}は、図3.1に示すようにフック部分Qを含まない。
3. 軽量コンクリートの場合は、表の値に5dを加えたものとする。



- 耐力壁の鉄筋の重ね継手の長さは、フックありなしにかかわらず40d以上（軽量コンクリートの場合は50d以上）と表3.1の重ね継手の長さのうちいずれか大きい値とする。
- 隅り合う継手の位置は、表3.2による。ただし、スラブ筋でD16以下の場合は及び壁筋の場合は除く。

表3.2 隅り合う継手の位置

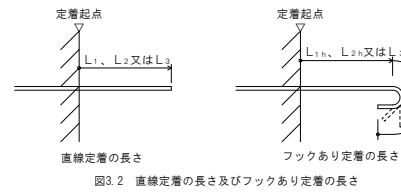
重ね継手の場合	フックありの場合	フックなしの場合
ガス圧接継手・溶接継手		
溶接継手		
機械式継手		

- 鉄筋の定着
 - 鉄筋の定着の長さは、表3.3及び図3.2による。

表3.3 鉄筋の定着の長さ

鉄筋の種類	コンクリートの設計基準強度 Fc (N/mm ²)	直線定着の長さ				フックあり定着の長さ			
		L ₁	L ₂	L ₃	L _{3h}	L _{2h}	L _{3h}	L _{3h}	
S0295	18	45d	40d	35d	35d	30d	30d	30d	
	21	40d	35d	30d	30d	25d	25d	25d	
	24, 27	35d	30d	25d	25d	20d	20d	20d	
	30, 33, 36	35d	30d	25d	25d	20d	20d	20d	
S0345	18	50d	40d	35d	35d	30d	30d	30d	
	21	45d	35d	30d	30d	25d	25d	25d	
	24, 27	40d	35d	30d	30d	25d	25d	25d	
	30, 33, 36	35d	30d	25d	25d	20d	20d	20d	
S0390	21	50d	40d	35d	35d	30d	30d	30d	
	24, 27	45d	40d	35d	35d	30d	30d	30d	
	30, 33, 36	40d	35d	30d	30d	25d	25d	25d	

1. L₁、L_{1h}: 2. から4. まで以外の直線定着の長さ及びフックあり定着の長さ。
2. L₂、L_{2h}: 割製破壊のおそれのない箇所への直線定着の長さ及びフックあり定着の長さ。
3. L₃: 小梁及びスラブの下端筋の直線定着の長さ。ただし、基礎耐力スラブ及びこれを受ける小梁を除く。なお、() は片持ち小梁及び片持ちスラブの場合を示す。
4. L_{3h}: 小梁の下端筋のフックあり定着の長さ。
5. フックあり定着の場合は、図3.2に示すようにフック部分Qを含まない。また、中間部での折曲げは行わない。
6. 軽量コンクリートの場合は、表の値に5dを加えたものとする。



- 梁主筋の柱内折曲げ定着又は小梁及びスラブの上端筋の梁内折曲げ定着の方法は、図3.3による。次の(a)、(b)及び(c)をすべて満足するものとする。
 - 全長は表3.3に示す直線定着の長さ以上
 - 余長は8d以上
 - 仕口面から鉄筋外面までの投影定着長さL_a及びL_bは表3.4に示す長さとする。ただし、梁主筋の柱内定着においては、原則として、柱せいの3/4倍以上とする。

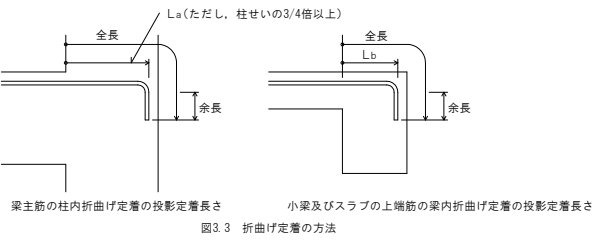
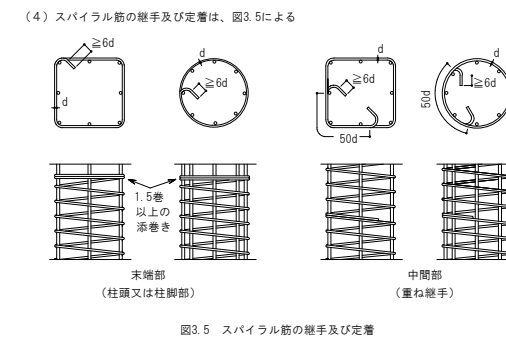
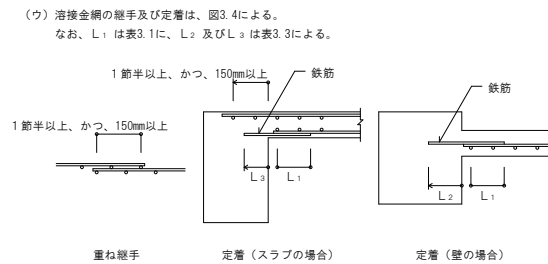


表3.4 鉄筋の投影定着の長さ

鉄筋の種類	コンクリートの設計基準強度 Fc (N/mm ²)	L _a	L _b
S0295	18	20d	15d
	21	15d	15d
	24, 27	15d	15d
	30, 33, 36	15d	15d
S0345	18	20d	20d
	21	20d	20d
	24, 27	20d	15d
	30, 33, 36	15d	15d
S0390	21	20d	20d
	24, 27	20d	20d
	30, 33, 36	20d	15d

1. L_a: 梁主筋の柱内折曲げ定着の投影定着長さ。（基礎梁、片持ち梁及び片持ちスラブを含む。）
2. L_b: 小梁及びスラブの上端筋の梁内折曲げ定着の投影定着長さ。（片持ち小梁及び片持ちスラブを除く。）
3. 軽量コンクリートの場合は、表の値に5dを加えたものとする。



4 鉄筋の最小かぶり厚さ及び間隔

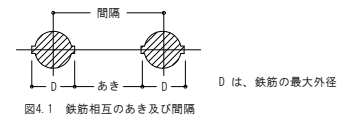
- 鉄筋及び溶接金網の最小かぶり厚さは、表4.1による。ただし、柱及び梁の主筋にD29以上を使用する場合は、主筋のかぶり厚さを径の1.5倍以上確保するように最小かぶり厚さを定める。

表4.1 鉄筋及び溶接金網の最小かぶり厚さ

構造部分の種類	最小かぶり厚さ (mm)	
	仕上げあり	仕上げなし
土に接しない部分	スラブ、耐力壁以外の壁	20
	柱、梁、耐力壁	30
	屋内	30
	屋外	40
土に接する部分	基礎、擁壁、耐力スラブ	*40
	煙突等高熱を受ける部分	60

- この表は、普通コンクリートに適用し、軽量コンクリートには適用しない。また、塩害を受けるおそれのある部分等耐久性上不利な箇所には適用しない。
- 「仕上げあり」とは、モルタル塗り等の仕上げのあるものとし、鉄筋の耐久性上有効でない仕上げ（仕上塗材、塗装等）のものを除く。
- スラブ、梁、基礎及び擁壁で、直接土に接する部分のかぶり厚さは、捨コンクリートの厚さを含まない。
- 杭基礎の場合の基礎下地筋のかぶり厚さは、杭先端からとする。

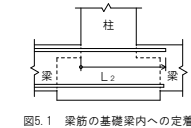
- 柱、梁等の鉄筋の加工に用いるかぶり厚さは、最小かぶり厚さに10mmを加えた数値を標準とする。
- 鉄筋組立後のかぶり厚さは、最小かぶり厚さ以上とする。
- 鉄筋相互のあきは図4.1により、次の値のうち最大のものを以上とする。
- 粗骨材の最大寸法の1.25倍
- 25mm
- 隅り合う鉄筋の径（呼び名の数値）の平均の1.5倍



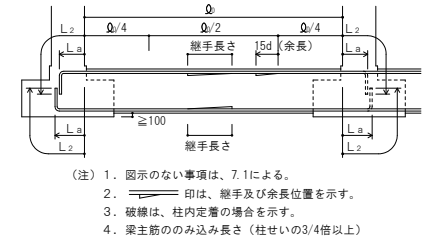
- 鉄骨鉄筋コンクリート造の場合、主筋と平行する鉄骨とのあきは、(4)による。
- 貫通孔に接する鉄筋のかぶり厚さは、最小かぶり厚さ以上とする。

5.1 基礎梁

- 一般事項
 - 梁筋は、連続柱で柱に接する梁筋が同数の時は柱をまたいで引き通すものとし、鉄筋の本数が異なる場合には、図5.1のように反対側の梁に定着する。外端部や隅部では、折り曲げて定着する。
 - 梁筋を柱内に定着する場合は、7.1(2)(a)による。

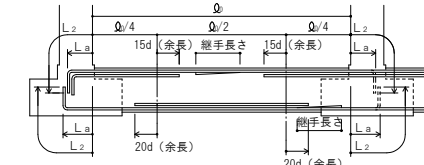


- 独立基礎で基礎梁にスラブが付かない場合の主筋の継手、定着及び余長は、図5.2による。



- 図示のない事項は、7.1による。
- 印は、継手及び余長位置を示す。
- 破線は、柱内定着の場合を示す。
- 梁主筋のみ込み長さ（柱せいの3/4倍以上）

- 独立基礎で基礎梁にスラブが付く場合の主筋の継手、定着及び余長は、図5.3による。ただし、耐力スラブが付く場合は、(4)による。



- 図示のない事項は、7.1による。
- 印は、継手及び余長位置を示す。
- 破線は、柱内定着の場合を示す。
- 梁主筋のみ込み長さ（柱せいの3/4倍以上）

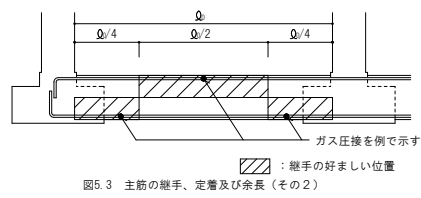
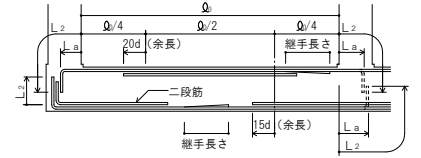


図5.3 主筋の継手、定着及び余長（その2）

(4) 連続基礎及びべた基礎の場合の主筋の継手、定着及び余長は、図5.4による。（耐圧スラブがつく場合を含む）



(注) 1. 図示のない事項は、7.1による。
2. 印は、継手及び余長位置を示す。
3. 破線は、柱内定着の場合を示す。
4. 梁主筋のみ込み長さ（柱せいの3/4倍以上）

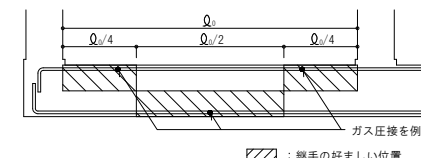


図5.4 主筋の継手、定着及び余長（その3）

5.2 基礎梁のあばら筋等

(1) 一般事項

(ア) あばら筋の径および間隔は、設計図による。
(イ) あばら筋組立の形及びフックの位置は、7.2(2)による。
また、副あばら筋組立の形及びフックの位置は7.2(3)による。
ただし、梁の上下端にスラブが付く場合で、かつ、梁せいが1.5m以上の場合は、図5.5によることができる。

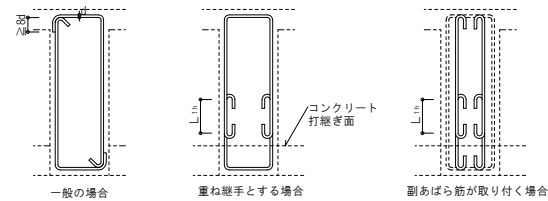


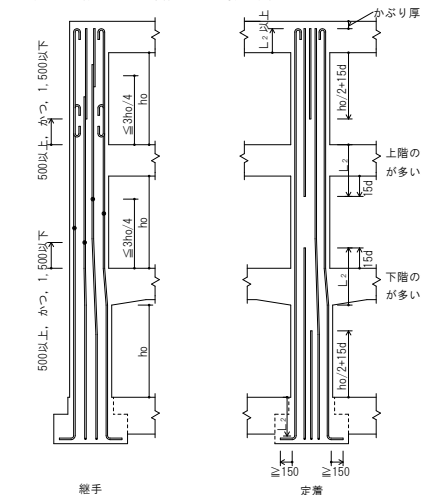
図5.5 あばら筋組立の形及びフックの位置

(2) 腹筋及び幅止め筋は、7.2による。ただし、梁せいが1.5m以上の場合は設計図による。
(3) あばら筋の割付けは、7.2(4)による。

6.1 柱

(1) 一般事項

(ア) 継手中心位置は、梁上端から500mm以上、1,500mm以下、かつ、3h/4 (hは柱の内法高さ) 以下とする。
(イ) 継手、定着及び余長は、図6.1による。
ただし、柱径定着長さL₂が確保できない場合は、設計図による。



(注) 1. 柱の四隅にある主筋で、重ね継手の場合及び最上階の柱頭にある場合には、フックを付ける。
2. 隣り合う継手の位置は、表3.2 [隣り合う継手の位置] による。
3. 継手及び定着は、すべての階に適用できる。

図6.1 柱主筋の継手、定着及び余長

(2) 柱打増し部

(ア) 打増し部分に、壁、梁及びスラブ等がとりつく場合は、壁、梁及びスラブ筋等の定着長さには、打増し部分を含まない。
(イ) 土に接する柱周囲の打増しは図6.2による。

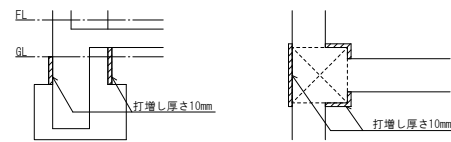


図6.2 柱打増し部

6.2 帯筋

(1) 帯筋の種類及び間隔は、設計図による。

(2) 帯筋組立の形は図6.3(イ)による。適用は構造図による。構造図に記載がなければ次による。

(ア) 形は、図6.3(イ)とする。
ただし、H形の135°曲げのフックが困難な場合は、W-I形とする。
(イ) 溶接する場合の溶接長さL₁は、両面重ねアーク溶接の場合は5d以上、片面重ねアーク溶接の場合は10d以上とする。
(ウ) S P形において、柱頭及び柱脚の端部は1.5巻以上の添巻きを行う。

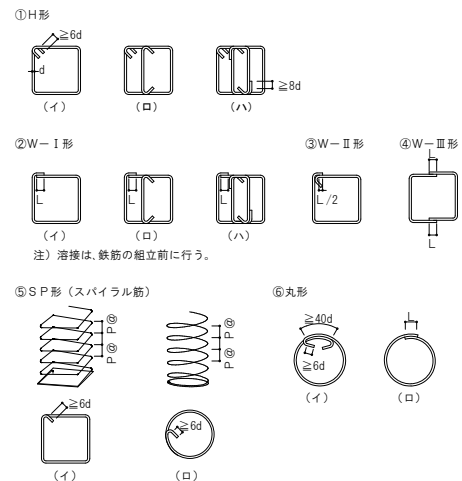
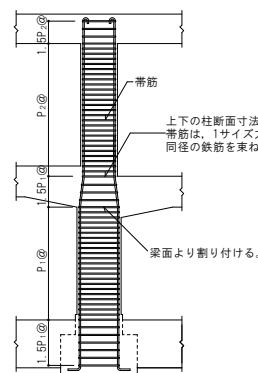


図6.3 帯筋組立の形

(3) フック及び継手の位置は交互とする。
(4) 帯筋の割付けは図6.4とし、それ以外の場合は設計図による。



(注) 1. 柱に取り付く段差がある場合、帯筋の間隔を1.5P@または1.5P@とする範囲は、その柱に取り付くすべての梁を考慮して適用する。
2. 図中のP₁@、P₂@は、特記された帯筋の間隔を示す。

図6.4 帯筋の割付け

7.1 大梁

(1) 一般事項

(ア) 梁の上がり下がり及びFLを基準とした寸法値とする。
(イ) 地中梁下の砂利地層厚及び捨てコンクリート地層厚は設計図による。
(ウ) 打増し部分に、スラブ、壁、梁筋等が取り付く場合は、スラブ、壁、梁筋等の定着長さには、打増し部分を含まない。

(2) 大梁主筋の継手及び定着の一般事項

(ア) 継手中心位置は、次による。
上端筋：中央 Q₀/2以内
下端筋：柱より梁せいの(D)以上離し、Q₀/4を加えた範囲以内
(イ) 継手中央部の位置、定着長さ及び余長は図7.3及び図7.4による。
(ウ) 梁筋は、連続端で柱に接する梁の主筋が、同数の時は柱をまたいで引き通すものとし、鉄筋の本数が異なる場合には、図7.1のように反対側の梁に定着する。外端部や隅部では、折り曲げて定着する。

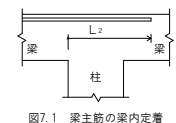


図7.1 大梁主筋の梁内定着

(エ) 梁主筋を柱内に折り曲げて定着する場合は次による。

なお、定着の方法は3(2)(イ)による。
上端筋：曲げ降ろす
下端筋（一般）：原則、曲げ上げる。
下端筋（ハンチ付き）：原則、曲げ上げる。
(オ) 梁にハンチをつける場合、その傾斜は設計図による。
(カ) 段違い梁は、図7.2による。

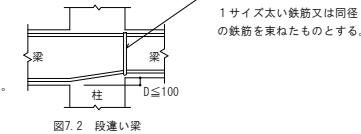
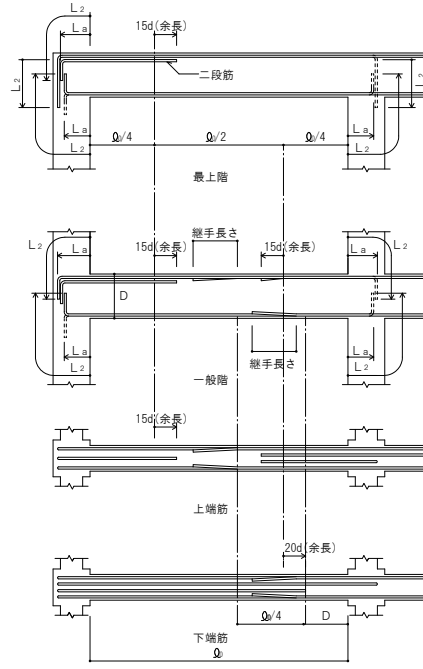


図7.2 段違い梁

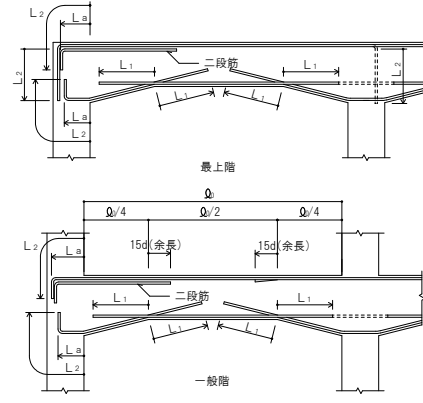
(3) ハンチのない場合の重ね継手、定着及び余長は、図7.3による。



(注) 1. 梁主筋の重ね継手は、梁の出隅及び下端の両端にある場合（基礎梁を除く）には、フックを付ける。
2. 印は、継手及び余長を示す。
3. 破線は、柱内定着の場合を示す。
4. 梁主筋のみ込み長さ（柱せいの3/4倍以上）

図7.3 大梁の重ね継手、定着及び余長

(4) ハンチのある場合の定着及び余長は、図7.4による。



(注) 1. 梁主筋の重ね継手は、梁の出隅及び下端の両端にある場合（基礎梁を除く）には、フックを付ける。
2. 印は、継手及び余長を示す。
3. 梁内定着の端部下端筋が接近するときは、*****のように引き通すことができる。
4. 破線は、柱内定着を示す。
5. 梁主筋のみ込み長さ（柱せいの3/4倍以上）

図7.4 ハンチのある大梁の定着及び余長

7.2 あばら筋等

(1) あばら筋、腹筋及び幅止め筋の一般事項

(ア) あばら筋の種類、径及び間隔は、設計図による。
(イ) 腹筋に継手を設ける場合の継手長さは、150mm程度とし、定着長さは図7.6による。
ただし、腹筋を計算上考慮している場合の継手長さは、定着長さは設計図による。
(ウ) 幅止め筋及び受け用幅止め筋は、D10-1,000@程度とする。

(2) あばら筋組立の形及びフックの位置

(ア) 形は、図7.5.1(イ)とする。
ただし、L形梁の場合は、②または③、T形梁の場合は②～④とすることができる。

(イ) フックの位置

(a) ①の場合は交互とする。
(b) ②の場合 L形ではスラブの付く側、T形では交互とする。
(c) ③の場合は床版の付く側を90°折曲げとする。

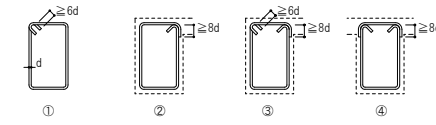


図7.5.1 あばら筋組立の形

(3) 副あばら筋組立の形及びフックの位置

(ア) 形は、図7.5.2(イ)または(ロ)とする。
ただし、L形梁またはT形梁の場合は⑦とすることができる。

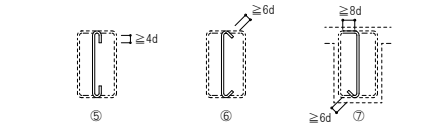
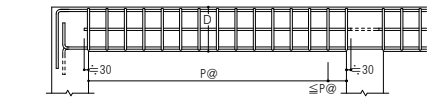


図7.5.2 副あばら筋組立の形

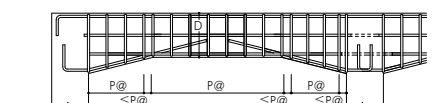
(4) あばら筋の割付け

(ア) 間隔が一様でハンチのない場合は、図7.6による。



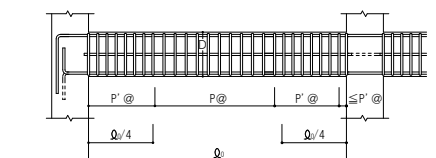
(注) 1. あばら筋は、柱面の位置から割り付ける。
2. 図中のP@は、特記されたあばら筋の間隔を示す。
図7.6 あばら筋の割付け（その1）

(イ) 間隔が一様でハンチのある場合は、図7.7による。



(注) 1. あばら筋は、柱面の位置から割り付ける。
2. 図中のP@は、特記されたあばら筋の間隔を示す。
図7.7 あばら筋の割付け（その2）

(ウ) 梁の端部で間隔の異なる場合は、図7.8による。



(注) 1. あばら筋は、柱面の位置から割り付ける。
2. 図中のP@、P'@は、特記されたあばら筋の間隔を示す。
図7.8 あばら筋の割付け（その3）

(5) 腹筋及び幅止め筋

一般の梁は、図7.9による。

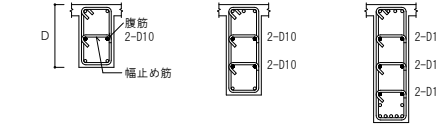


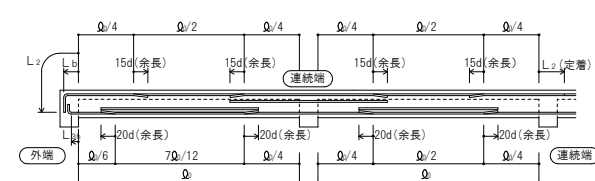
図7.9 腹筋および幅止め筋

1. 腹筋に継手を設ける場合の継手長さは、150mm程度とする。
2. 幅止め筋及び受け用幅止め筋は、D10-1,000@程度とする。

7.3 小梁

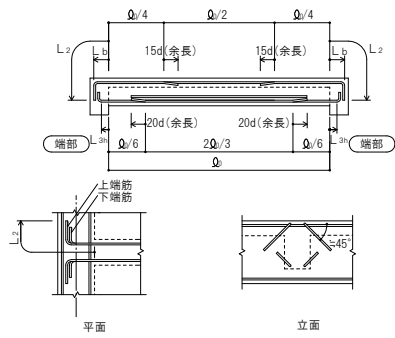
(1) 小梁主筋の継手、定着及び余長

連続小梁の場合は、図7.10による。



(注) 1. 図示のない事項は、5.1及び7.1に準ずる。
2. 印は、余長位置を示す。
図7.10 小梁主筋の継手、定着及び余長（その1）

(2) 単独小梁の場合は、図7.11による。



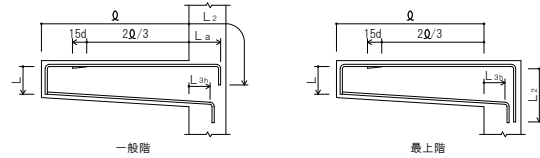
直交する梁へ斜めに定着する場合
 (注) 1. 図示のない事項は、5.1及び7.1に準ずる。
 2. 印は、余長位置を示す。
 図7.11 小梁主筋の継手、定着及び余長(その2)

(3) あばら筋は、7.2による。

7.4 片持梁

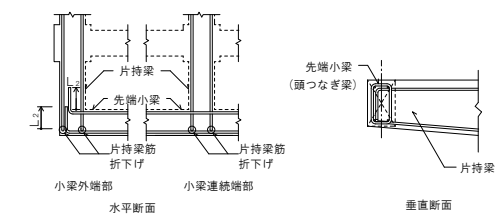
(1) 片持梁主筋の定着及び余長

(ア) 先端に小梁のない場合は、図7.12による。



(注) 1. 図示のない事項は、7.1による。
 2. 印は、余長位置を示す。
 3. 先端の折曲げの長さLは、梁せいからかぶり厚さを除いた長さとする。
 図7.12 片持梁主筋の定着及び余長

(イ) 先端に小梁がある場合は、図7.13による。



(注) 1. 図示のない事項は、(ア)による。
 2. 先端小梁終端部の主筋は、片持梁内に水平定着する。
 3. 先端小梁の連続端は、片持梁の先端を貫通する通し筋としてよい。
 図7.13 片持梁主筋の定着

(2) あばら筋は、7.2による。

8.1 壁

(1) 一般事項

(ア) 一般壁筋の重ね継手の長さはLとし、耐力壁筋の重ね継手長さは特記による。また定着の長さはLとし、鉄筋の継手位置は、柱・梁部以外とする。

(イ) 幅止め筋は、縦横ともD10-1,000@程度とする。

(ウ) 打増し部分に、壁及びスラブ等が取り付く場合は、壁及びスラブ筋等の定着長さには打増し部分は含まない。

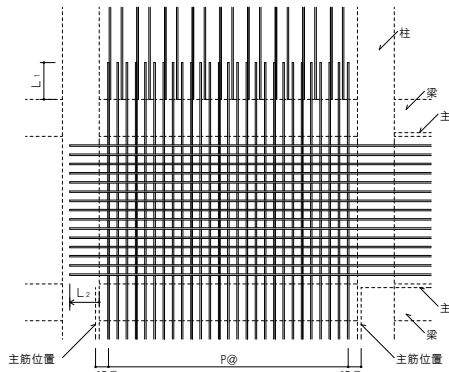


図8.1 壁の配筋 (注) 図中のP@は、特記された壁筋の間隔を示す。

(2) 壁の配筋は表8.1により、種別は設計図による。

表8.1 壁の配筋

種別	縦筋及び横筋	断面図 (mm)
W12	D10-200#シングル	120
W15A	D10-150#シングル	150
W15B	D10-100#シングル	150
W18A	D10-200#ダブル	180
W18B	D10-150#ダブル	180
W20A	D10-200#ダブル	200
W20B	D10-150#ダブル	200

(注) 壁筋の配筋順序は、規定しない。

(3) 片持スラブ形階段を受ける壁の配筋は表8.2により、種別は設計図による。

表8.2 片持スラブ形階段を受ける壁の配筋

種別	縦筋及び横筋	断面図 (mm)	階段の配筋種別(表10.1)
KW1	縦筋	D13-200#ダブル	KA1
	横筋	D10-200#ダブル	
KW2	縦筋	D13-150#ダブル	KA2
	横筋	D10-200#ダブル	

(注) 縦筋は、横筋の外側に配筋する。

(4) 土圧を受ける壁の配筋は、設計図による。

(5) 壁の交差部及び端部の配筋は、図8.2による。

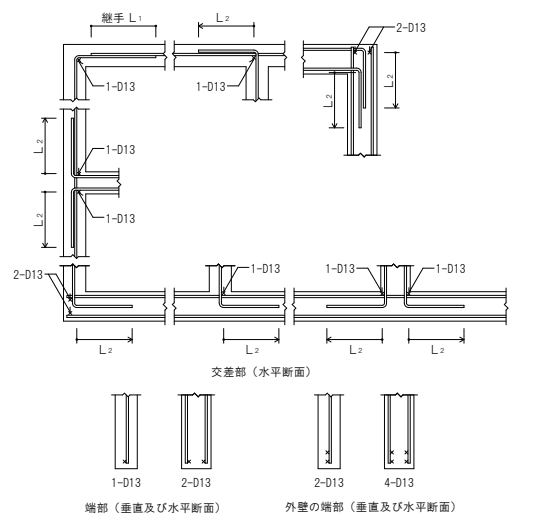


図8.2 壁の交差部及び端部の配筋

8.2 一般壁の補強

(1) 壁開口部の補強

(ア) 耐力壁を除く壁開口部の補強筋は、A形は表8.3、B形は表8.4とし、適用は構造図による。なお、耐力壁の補強筋は、構造図による。

表8.3 壁開口部補強筋(A形)

壁の種別	補強筋	
	縦横	斜め
W12, W15	1-D13	1-D13
W18, W20	2-D13	2-D13

表8.4 壁開口部補強筋(B形)

壁の種別	補強筋	
	縦横	斜め
W12, W15	2-D13	1-D13
W18, W20	4-D13	2-D13

(イ) 壁開口部補強の定着長さは、図8.3による。

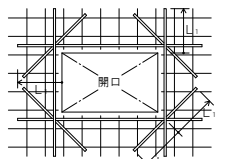


図8.3 壁開口部補強筋の定着長さ

(2) コンセントボックス等を壁に埋め込む場合の補強は、設計図による。

9.1 スラブ

- スラブ及び土間コンクリートの上り下りは、FLを基準とした寸法とする。
- 土間スラブ下の砂利地床厚及び捨てコンクリート厚は設計図による。
- 土間コンクリート補強筋(D0)の配筋及びコンクリート厚さは設計図による。
- スラブの配筋(S形配筋)は表9.1及び図9.1により、配筋種別及びスラブ厚さは、設計図による。

表9.1 S形配筋

配筋種別	短辺方向(主筋) 全域		長辺方向(配力筋) 全域	
	短辺方向(主筋) 全域	長辺方向(配力筋) 全域	短辺方向(主筋) 全域	長辺方向(配力筋) 全域
S1	D13-100#	D13-100#	S8	D10, D13-150#
S2	同上	D13-150#	S9	同上
S3	同上	D10, D13-150#	S10	D10, D13-200#
S4	D13-150#	D13-150#	S11	同上
S5	同上	D10, D13-150#	S12	同上
S6	同上	D10-150#	S13	D10-200#
S7	D10, D13-150#	D10, D13-150#	S14	同上

(注) 上端筋、下端筋とも同一配筋とする。

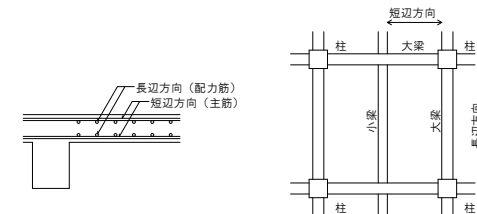


図9.1 スラブの配筋

- 配筋の割付けは、中央から行い、端部は定められた間隔以下とする。
- 原則として引き通し、鉄筋の重ね継手長さはL1とする。
- 定着長さ及び受け筋は、図9.2による。ただし、引き通すことができない場合は、図9.3により梁内に定着する。

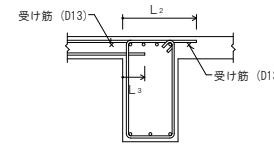


図9.2 スラブ筋の定着長さ及び受け筋(その1)

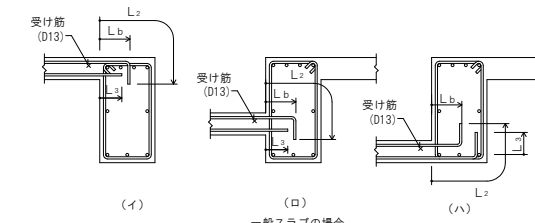


図9.3 スラブ筋の定着長さ及び受け筋(その2)

9.2 片持スラブ

片持スラブは、プレキャストコンクリート部材又は現場打ちコンクリート部材とする。プレキャストコンクリート部材とする場合の躯体への接続方法は、設計図による。

片持スラブの配筋は、次による。

(1) 片持スラブの配筋(CS形配筋)は、表9.2並びに図9.4及び図9.5により、配筋種別及びスラブ厚さは、設計図による。

表9.2 CS形配筋

配筋種別	主筋		配筋種別	主筋	
	上	下		上	下
CS1	上	D13-100#	CS5	上	D10-200#
	下	D13-200#		下	D10-400#
CS2	上	D13-150#	CS6	上	D10, D13-200#
	下	D13-300#		下	—
CS3	上	D10, D13-150#	CS7	上	D10-200#
	下	D10, D13-300#		下	—
CS4	上	D10, D13-200#			
	下	D10-200#			

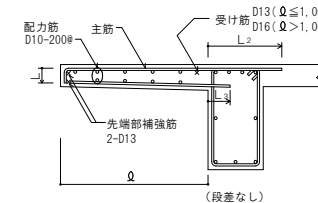


図9.4 片持スラブの配筋 (CS11 からCS15)

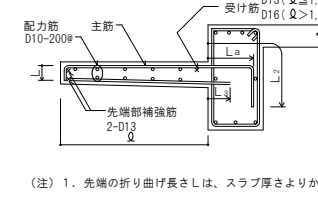


図9.5 片持スラブの配筋 (CS16及びCS17)

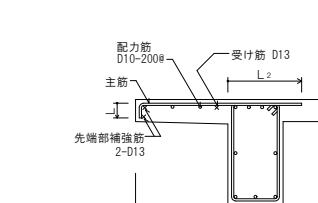


図9.6 先端に壁が付く場合の配筋

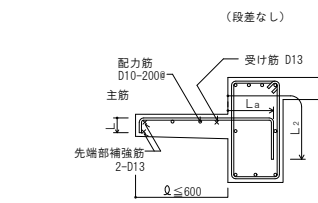


図9.7 片持ちスラブ出隅部の補強配筋

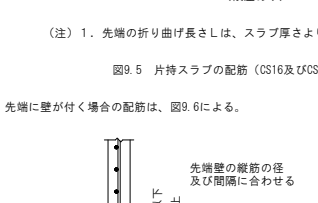


図9.8 出隅部の補強配筋

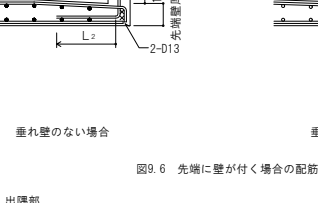


図9.9 出隅部の補強配筋

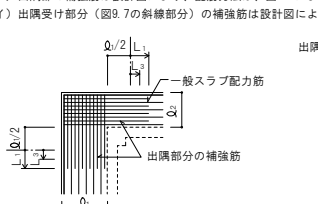


図9.10 出隅部の補強配筋

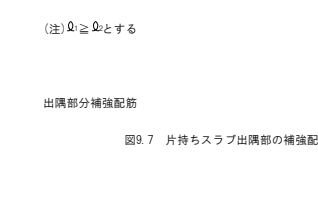
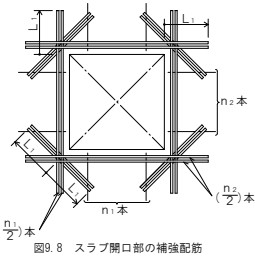


図9.11 出隅部の補強配筋

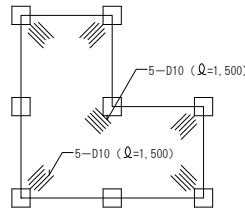
9.3 スラブ等の補強

- (1) スラブ開口部の補強
 スラブ開口部の補強方法は、設計図による。設計図になければ、(ア)イによる。
 (ア) スラブ開口部の最大径が700mm以下の場合、図9.8により開口部によって切られる鉄筋と同量の鉄筋で周囲を補強し、隅角部に斜め方向に2-D13 (Q=2L) シングルを上下筋の内側に配筋する。

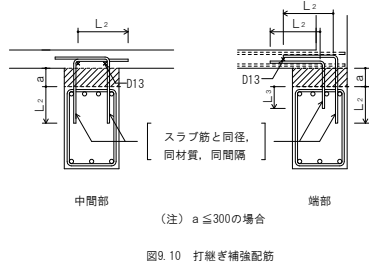


- イ) スラブ開口部の最大径が両方向の配筋間隔以下で、鉄筋を緩やかに曲げることで、開口部を避けて配筋できる場合は、補強を省略することができる。

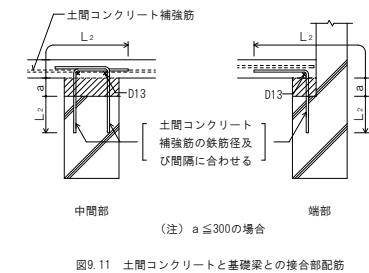
- (2) 屋根スラブの補強
 屋根スラブの出隅及び入隅部分には、図9.9により、補強筋を上端筋の下側に配置する。



- (3) 土間スラブの打継ぎ補強
 基礎梁とスラブを一体打ちとしないで、打継ぎを設ける場合の補強は図9.10による。ただし、土間スラブとは、土に接するスラブでS形の配筋によるものをいう。



- (4) 土間コンクリートの補強
 土間コンクリートの補強筋は、設計図による。なお、基礎梁との接合部は、図9.11による。



10.1 片持スラブ形階段

片持スラブ形階段の配筋は、表10.1及び図10.1により、寸法及び配筋種別は、設計図による。

配筋種別	KA1	KA2
配筋図		
配筋種別	KA3	KA4
配筋図		

t: スラブ厚さ

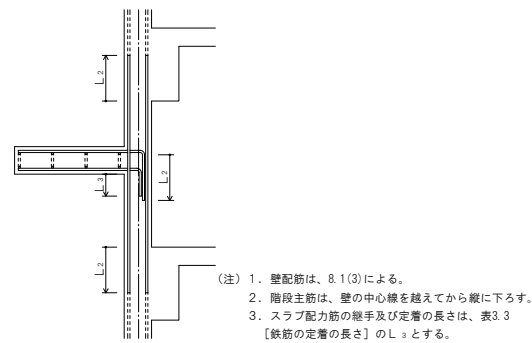


図10.1 片持スラブ形階段配筋の定着

10.2 二辺固定スラブ形階段

二辺固定スラブ形階段は、プレキャストコンクリート部材又は現場打ちコンクリート部材とする。プレキャストコンクリート部材とする場合の躯体への接続方法は設計図による。

二辺固定スラブ形階段の配筋は表10.2並びに図10.2及び図10.3により、寸法及び配筋種別は、設計図による。

表10.2 二辺固定スラブ形階段

配筋種別	上端筋、下端筋とも(全域)
KB1	D13-200#
KB2	D13-150#
KB3	D13-100#
KB4	D13, D16-150#
KB5	D16-150#
KB6	D16-125#
KB7	D16-100#

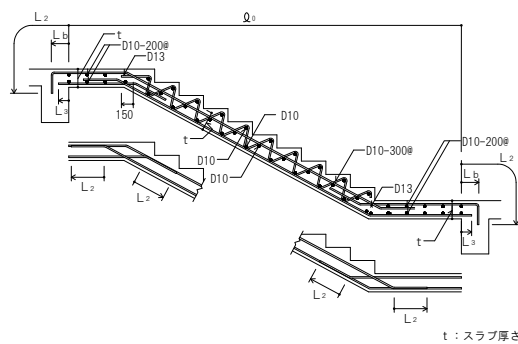


図10.2 二辺固定スラブ形階段配筋(その1)

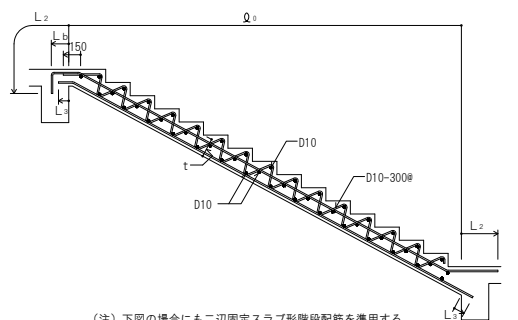


図10.3 二辺固定スラブ形階段配筋(その2)

11.1 梁貫通孔

- (1) 梁貫通孔は、次による。
 (ア) 梁貫通孔補強筋の名称等は、図11.1による。
 (イ) 孔の径は、梁せいの1/3以下とする。
 (ウ) 孔の上下方向の位置は、梁せい中心付近とし、梁中央部下端は梁下端よりD/3 (Dは梁せい)の範囲には設けてはならない。
 (エ) 孔は、柱面から原則として、1.5D以上離す。ただし、基礎梁及び壁付帯梁を除く。
 (オ) 孔が並列する場合の中心間隔は、孔の径の平均値の3倍以上とする。
 (カ) 縦筋及び上下縦筋は、あばら筋の形に配筋する。
 (キ) 補強筋は、主筋の内側とする。また、鉄筋の定着長さは、図11.2による。
 (ク) 孔の径が梁せいの1/10以下、かつ、150mm未満のものは、鉄筋を緩やかに曲げることで、開口部を避けて配筋でき、かつ、設計図に特記された場合において、補強を省略することができる。
 (ケ) 溶接金網の余長は、1格子以上とし、突出しは10mm以上とする。
 (コ) 溶接金網の貫通孔部分には、鉄筋1-13φのリング筋を取り付ける。なお、リング筋は、溶接金網に4箇所以上溶接する。
 (サ) 溶接金網の割付け始点は、横筋ではあばら筋の下側とし、縦筋では貫通孔の中心とする。
 (シ) 他の開孔を設けない範囲は、図11.3による。

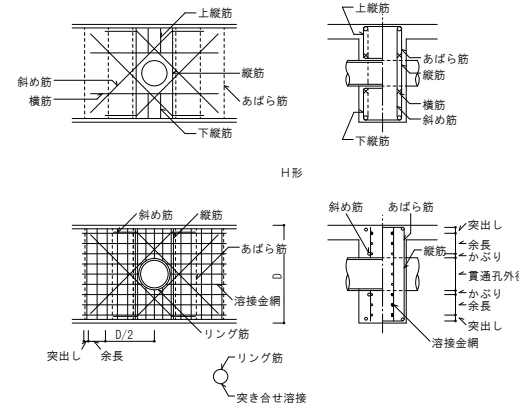


図11.1 梁貫通孔補強筋の名称等

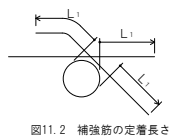


図11.2 補強筋の定着長さ

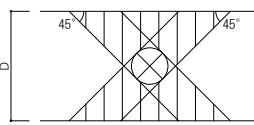


図11.3 他の開孔を設けない範囲

- (2) 梁貫通孔の補強形式は表11.1~表11.2により、配筋種別は設計図による。

表11.1 H形配筋

配筋種別	斜め筋	縦筋	横筋	上下縦筋	配筋図
H1	2-2-D13	なし	なし	なし	
H2	2-2-D13	2-2-D13	なし	なし	
H3	4-2-D13	2-2-D13	2-2-D13	2-2-D13	
H4	4-2-D16	2-2-D13	2-2-D13	2-2-D13	
H5	4-2-D16	なし	なし	なし	
H6	4-2-D19	4-2-D13	2-2-D13	3-2-D13	
H7	4-2-D22	なし	なし	なし	

- (注) は、一般部分のあばら筋を示す。

表11.2 M形配筋

配筋種別	斜め筋	縦筋	溶接金網	配筋図
M1	なし	なし	なし	
M2	2-2-D13	2-2-D13	なし	
M3	2-2-D13	2-2-D13	2-6φ-100#	
M4	4-2-D13	2-2-D13	2-6φ-100#	
M5	4-2-D16	2-2-D13	2-6φ-100#	
M6	4-2-D16	4-2-D13	2-6φ-100#	
M7	4-2-D19	4-2-D13	2-6φ-100#	

- (注) は、一般部分のあばら筋を示す。

11.2 コンクリートブロック横壁との取合い

- (1) 控壁は、次による。
 (ア) 控壁の配量は、設計図による。
 (イ) 配筋は、図11.4による。

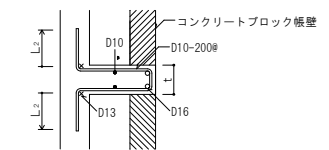


図11.4 控壁の配筋(水平、垂直とも)

- (2) 横壁が土間コンクリート上に設置される場合の補強は、図11.5による。

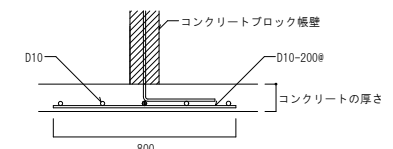


図11.5 壁付き土間コンクリートの補強配筋

11.3 パラベット

パラベットの先端補強筋は図11.6により、コンクリート厚さ及び配筋は構造図による。

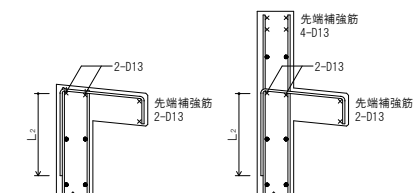


図11.6 パラベットの先端補強筋

12 擁壁

宅地造成等規制区域外での高さ2m以下の擁壁の鉄筋の定着長さは図12により、コンクリートの厚さ及び配筋は構造図による。

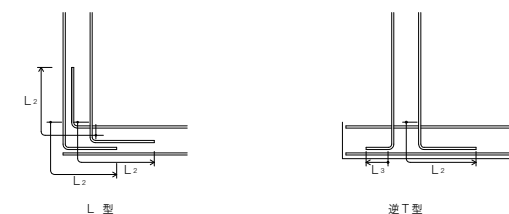
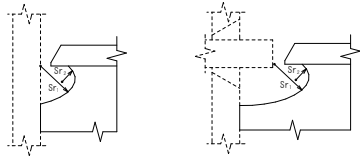


図12 擁壁の鉄筋の定着長さ

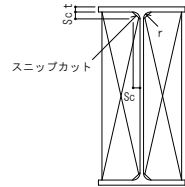
(4) スカラップ
改良型スカラップ
(ア) スカラップ半径Srは35mmとする。Srは10mmとする。
(イ) スカラップ円弧の曲線は、フランジに滑らかに接するように加工し、複合円は滑らかに仕上げ上げる。



従来型スカラップ
スカラップ半径Srは35mmとする。



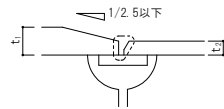
(5) スニップカット
(ア) スニップカット部は溶接により埋めるものとする。



(イ) スニップカットの寸法は、下表による。ただし、既製形鋼のスニップカットについては、 $Sc=r+2$ により求めるものとする。

t	6	9	12	16以上
Sc	10	12	14	15

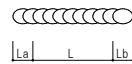
(6) 溶接部分の段差
完全溶込み溶接を行う部分の板厚の差による段差が10mmを超える場合、又は低応力高サイクル疲労を受ける場合



1-5 重ねアーク溶接（フレア溶接）を行う場合の溶接長さ

鉄筋又は軽量形鋼に重ねアーク溶接（フレア溶接）を行う場合の溶接長さ（L）は、ビードの始点（La）及びクレーター（Lb）を除いた部分の長さとする。

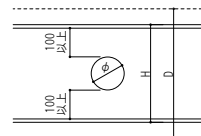
L：片面フレア溶接の場合 10d
両面フレア溶接の場合 5d
La及びLbは1d（軽量形鋼については1S）以上
d：異形鉄筋の呼び名に用いた数値
S：溶接のサイズ



1-6 梁貫通孔補強

(1) 鉄骨造及び鉄骨鉄筋コンクリート造の鉄骨梁ウェブ部に貫通孔を設ける場合は、次による。
(ア) 貫通孔の内径寸法は、鉄骨せい1/2以下かつ鉄筋コンクリート梁せい1/3以下とする。
(イ) 貫通孔間隔は、両側の貫通孔径の平均値の、鉄骨造で2倍以上、鉄骨鉄筋コンクリート造で3倍以上確保する。

梁貫通孔の位置の限度（単位：mm）

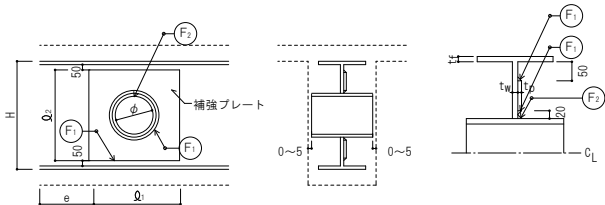


H：鉄骨せい
D：はりせい
φ：貫通孔内径寸法
(φ ≤ H/2かつφ ≤ D/3)

(2) 貫通孔の補強方法は、構造図による。
補強プレート法及び補強トラス法の溶接等は、以下による。

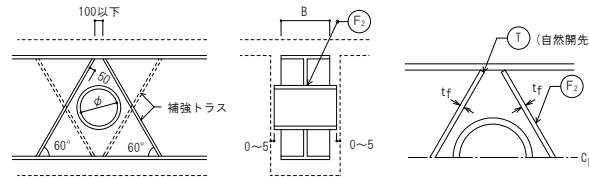
補強プレート法

(ア) 補強プレートが16mm以上となる場合は、必要な長さの1/2以上の補強プレートをウェブ両面から溶接する。
(イ) 補強プレートは丸型としても良い。上下フランジとのあき50mmについては施工性を考慮して小さくすることもできる。

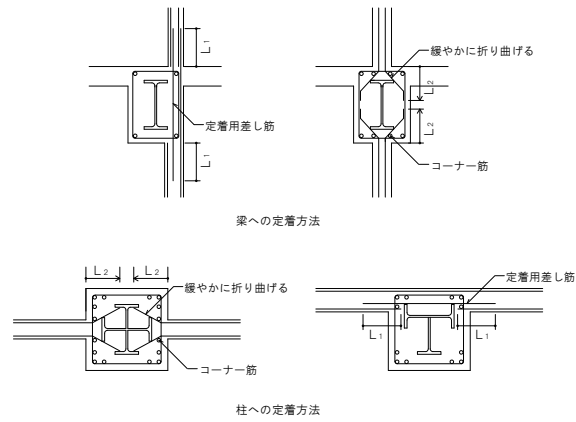


φは3φまたはφのうち小さい方とする。（e ≧ Hとする）
e：材端と補強プレートの間隔

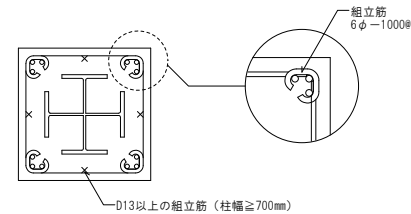
補強トラス法
スリーブの取付けは、全周隅内溶接とする。



1-7 壁筋の周辺部材への定着

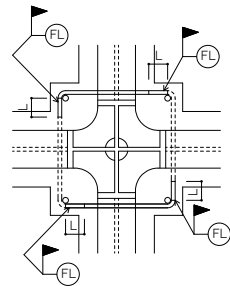


1-8 柱組立筋



1-9 仕口部内の帯筋の加工及び組立

片面溶接の溶接長さ（L）は、鉄筋の呼び名の数値の10倍以上とする。ただし、溶接によらない場合は135°曲げフックとする。

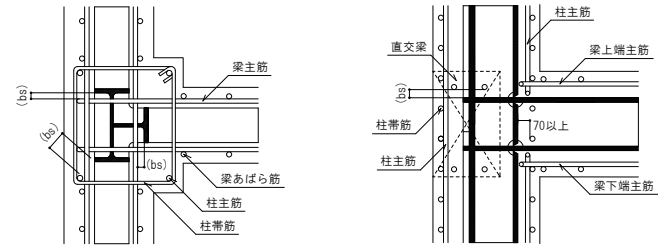


1-10 鉄筋貫通孔の径及び位置

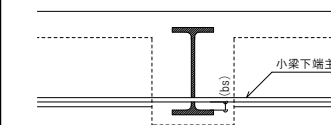
(a) 鉄筋貫通孔の径
鉄筋の貫通孔径の最大値は、下表による。

鉄筋の呼び名	(単位：mm)							
	D10	D13	D16	D19	D22	D25	D29	D32
鉄筋貫通孔の径	21	24	28	31	35	38	43	46

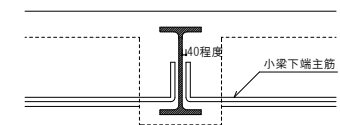
(b) 鉄筋貫通孔の位置
鉄骨フランジには、鉄筋貫通孔を設けないものとする。



小梁下端主筋が貫通する場合



小梁下端主筋が貫通しない場合（単位：mm）



(bs)：主筋と平行する鉄骨とのあき

1-11 広幅平鋼の取り扱いについて

(a) BH材のフランジ及びフランジに使用する外側スプライスプレートは、PL表記であってもFB又はPLとする。
(b) BH材のフランジ及びフランジに使用する外側スプライスプレートの適用幅及び厚さは下表による。

幅	厚さ										
	6	9	12	16	19	22	25	28	32	36	40
100	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
125	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
150	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
175	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
200	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
250	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
300	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
350	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
400	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
450											
500											

1-12 普通ボルト接合

もや、鋼縁類の取付け用ボルトを普通ボルト接合とする場合は、二重ナットとする。

1-13 その他

(a) フィラープレートの材質
フィラープレートを使用する場合、材質はSS400とする。



角形鋼管

F値295N/mm²以下
□-150×150 ~ □-300×300 用

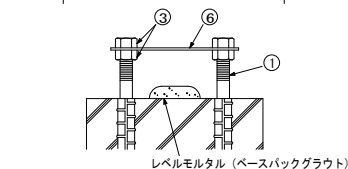
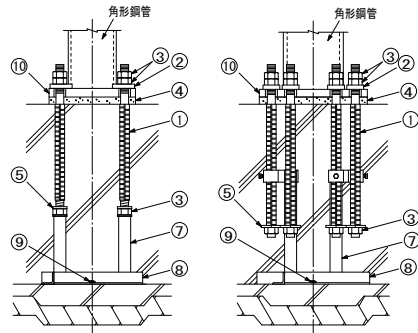
(一財)日本建築センターによる一般評定「BCJ評定-ST0093-19」(令和6年6月21日付)

ベースパック柱脚工法設計標準図

2024年10月作成

1. 工法概要

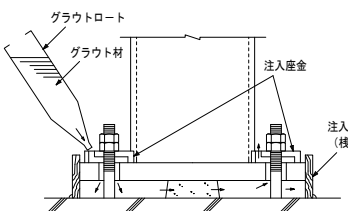
1.1 構成部材



- ① アンカーボルト
- ② 注入座金
- ③ Mナット
- ④ ベースパックグラウト(グラウト材)
- ⑤ 定着座金
- ⑥ テンプレート
- ⑦ フレームポスト
- ⑧ フレームベース
- ⑨ ステコンアンカー(コンクリートアンカー)
- ⑩ ベースプレート

(注)上記①~⑩の構成部材はベースパック構成部品として供給される。
(注)上記⑥~⑨は現場状況により仕様異なる場合がある。

1.2 柱脚の定着方法概要



2. 柱

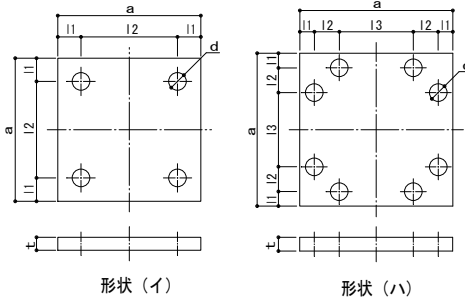
F値(N/mm ²)	鋼種	採用
235	BCP235	
	STKR400	
295	BCR295	○
	TSC295	

3. 構成部材・寸法

3.1 ベースプレート

●材質

SN490B 【JIS G 3136】



3.3 Mナット

【建築基準法第37条第二号に基づく国土交通大臣認定材料】

呼び	A	B	(e)
M27	22	41	47
M30	24	46	53
M33	26	50	58
M36	29	55	64
M39	31	60	69

3.4 定着座金

i) アンカーフレーム Aタイプの場合

適用 アンカーボルト	e1	t	d	材質
M27	55	9	28	SS400
M30	55	9	31	
M33	60	9	34	
M36	65	12	37	
M39	80	12	40	

ii) アンカーフレーム Cタイプの場合

適用 アンカーボルト	e1	e2	t	d	材質
M30	55	168	9	32	SS400
M33	60	173	9	35	
M36	65	178	9	38	

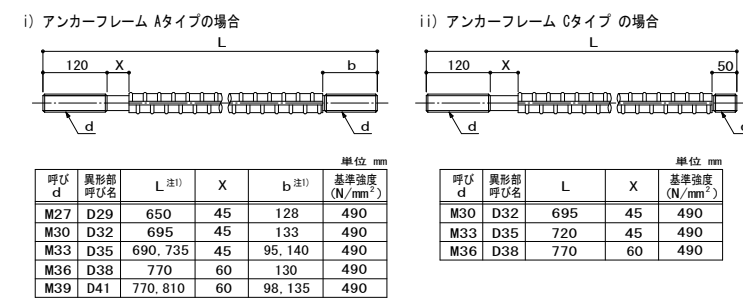
3.5 注入座金

【建築基準法第37条第二号に基づく国土交通大臣認定材料】

記号	適用 アンカーボルト	a1	a2	c	t	d
PM27	M27	32	42	101	18	28
PM30	M30	32	42	101	18	31
PM33	M33	35	45	110	18	34
PM36	M36	35	45	110	18	37
PM39	M39	38	48	118	18	40

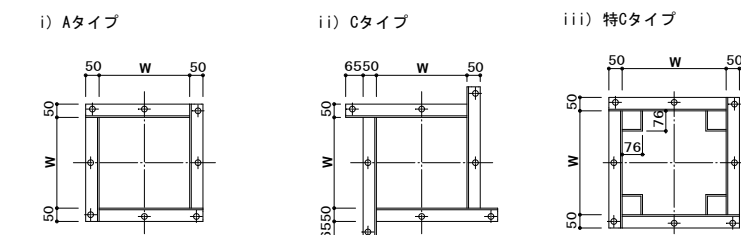
3.2 アンカーボルト (Mアンカーボルト)

【建築基準法第37条第二号に基づく国土交通大臣認定材料】



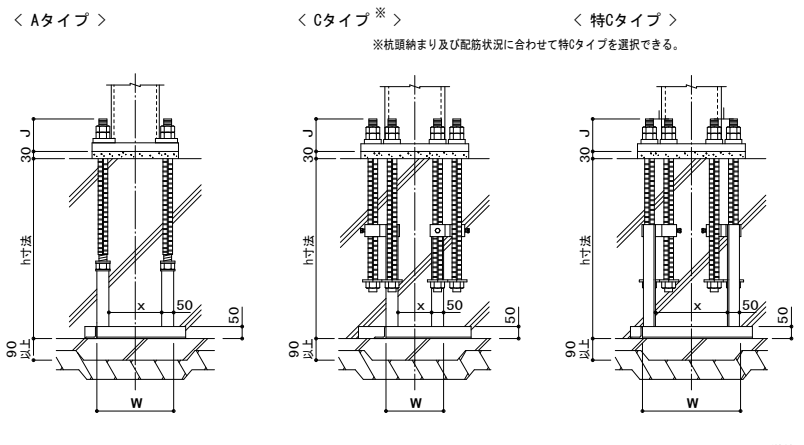
注1) 据付け高さが低い場合に短いアンカーボルトを使用する。

3.6 フレームベース



3.7 アンカーフレーム形状および据付け時諸寸法

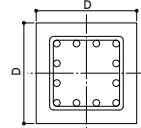
●ベースパックの据付け高さ(h寸法)はフレームベース下端からコンクリート柱型天端までを示す。据付けに最低限必要な高さ(最低h寸法)は下表に記載の値とする。



4. コンクリート柱型

4.1 形状・材質

●形状
形状は正方形とし、寸法は下表に記載の値とする。

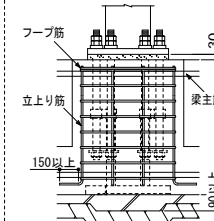


●コンクリート
普通コンクリートとし、設計基準強度は21N/mm²以上とする。

●鉄筋
SD295 (D13, D16)
SD345 (D19, D22)

4.2 配筋

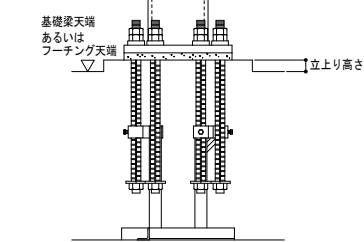
配筋仕様は下表による。



※立上り筋の頂部にはフックを設けなくてよい。
※トップフープはダブルとし、柱型上端近くに配置する。

4.3 基礎立上がり

●基礎立上がり高さは50mm以下とする。
※ただし基礎立上がり高さが50mmを超え300mm以下の場合、Lシリーズを使用することができる。



4.4 特記事項 上記内容によらない場合は下記による。

- 採用
 - 下表標準柱型寸法からの変更あり(「柱型寸法最大・最小値一覧」による)
 - 下表標準配筋仕様からの変更あり
 - 立上り筋に頂部フックが必要

5. 工場製作 (溶接)

■組立

- ベースプレートの中心線(がき線)に柱材軸心を合わせる。
- 溶接方法(完全溶込み溶接)
- 完全溶込み溶接とする。(JASS 6 鉄骨工事による)

完全溶込み溶接の優先標準 (JASS 6 鉄骨工事 2018年版より)

図	溶接方法	適用板厚 T (mm)	ルート間隔 G (mm)		ルート面積 (mm ²)		開先角度 α (°)		溶接姿勢
			標準値	許容差	標準値	許容差	標準値	許容差	
被覆アーク溶接	6~	7	-2, +0 (-3, +0)	2	-2, +1 (-2, +2)	α1: 45	-2.5, +0 (-5, +0)	下向き	
		9	-2, +0 (-3, +0)	2	-2, +1 (-2, +2)	α1: 35			
ガスシールドアーク溶接	6~	6	-2, +0 (-3, +0)	2	-2, +1 (-2, +2)	α1: 45	-2.5, +0 (-5, +0)	下向き	
		7	-2, +0 (-3, +0)	2	-2, +1 (-2, +2)	α1: 35			

許容差: 記号+0は制限無しを示す。
*2段書きは「鉄骨構造検査基準」に規定する許容差(上段:管理許容差、下段括弧内:限界許容差)を示す。

■ベースプレートの予熱

●気温(鋼材表面温度)が5°C以上でのベースプレートの予熱は次に示す予熱温度標準により行う。その他必要に応じて適切な予熱をする。

溶接方法	鋼種	板厚 (mm)	
		t < 32	32 ≤ t ≤ 50
低水素系被覆アーク溶接 ①)ガスシールドアーク溶接	SN490B	予熱なし	50 °C
	SN490B	予熱なし	予熱なし

※フラックス入りワイヤによるCO₂ガスシールドアーク溶接の予熱温度は、低水素被覆アーク溶接に準じる。

■検査方法: 溶接部の検査は超音波探傷検査により行う。

■施工管理: 7. 本工法の施工及び施工管理参照。

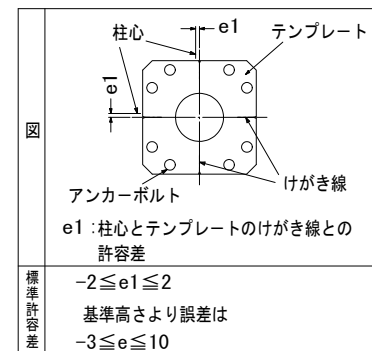
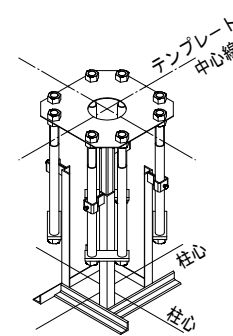
6. 工事場施工

6.1 基礎工事

●柱脚部の捨コンの厚さは90mm以上とし、表面は平滑に仕上げる。

6.2 アンカーボルト据付け

- アンカーボルト(フレーム)の組立ては、4隅のアンカーボルト4本で組立てを行う。
- フレームベースはステコンアンカーにより水平に固定する。
- 位置決めは、テンプレートの中心線と地墨等の柱心を合致させることにより行い、標準許容差は下図による。

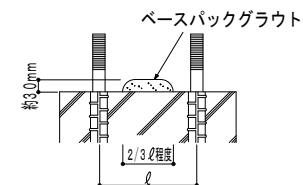


6.3 配筋およびコンクリート打設

- 配筋はアンカーボルト(フレーム)との取り合いを考慮する。
- コンクリート打設前にテンプレート位置精度を確認する。

6.4 建方

●レベルモルタルはベースパックグラウト(グラウト材)を使用し、大きさは右図による。



6.5 アンカーボルトの本締め(弛み止め)

●本締めはグラウト材の充填前に行い、ダブルナットを標準とする。

6.6 ベースパックグラウト(グラウト材)の注入

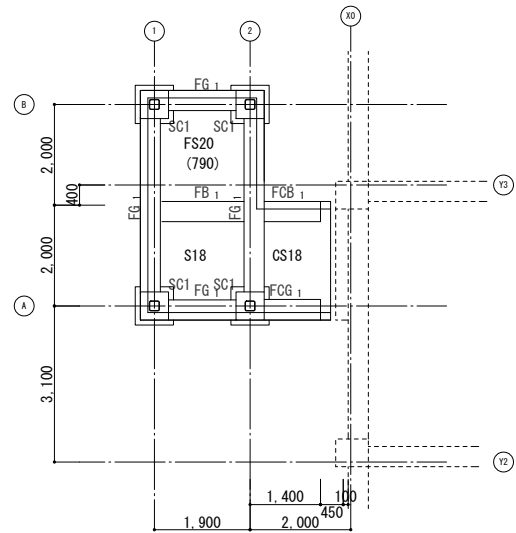
- グラウト材のカクハンは、グラウト材1袋(6kg)に対して、計量カップで1.0~1.1ℓの水を加え、電動カクハン機で混練することにより行う。
- グラウト材の注入は、グラウトロートを注入座金にセットし、グラウト材の自重により他の注入座金からグラウト材が噴き出るまで行う。

7. 本工法の施工及び施工管理

●本工法は、管理者又は施工者(元請)の管理のもとで実施するものとする。

●本工法のうち6.2アンカーボルト据付け及び6.6ベースパックグラウトの注入は、ベースパック・セレクトベース施工技術委員会によって認定された有資格者(ベースパック施工管理技術者・施工技能者)が施工を実施し、チェックシート等により施工管理を行うものとする。

●ベースプレート溶接部の施工管理は、鉄骨製作者に属する鉄骨製作管理技術者等による。



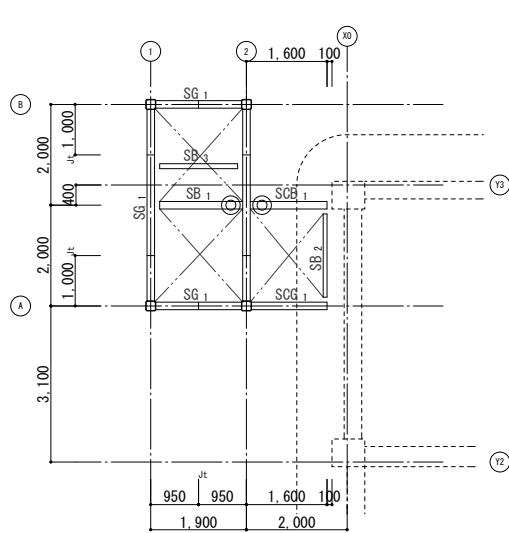
1階床伏図 S=1/100

特記事項

- 1FL=00.00m(標高TP) GL=1FL-500
- () 内の数字は、FLからのスラブ天端高さを示す。

特記なき限り下記による

1. 基礎梁・基礎小梁天端レベルは、1FL-290とする。
2. スラブ天端レベルはFL-40とする。
3. 壁はW15とする。



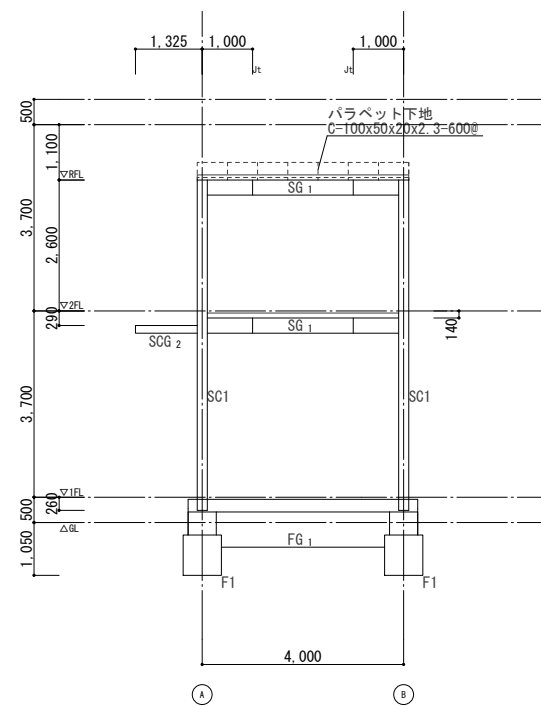
R階伏図 S=1/100

特記事項

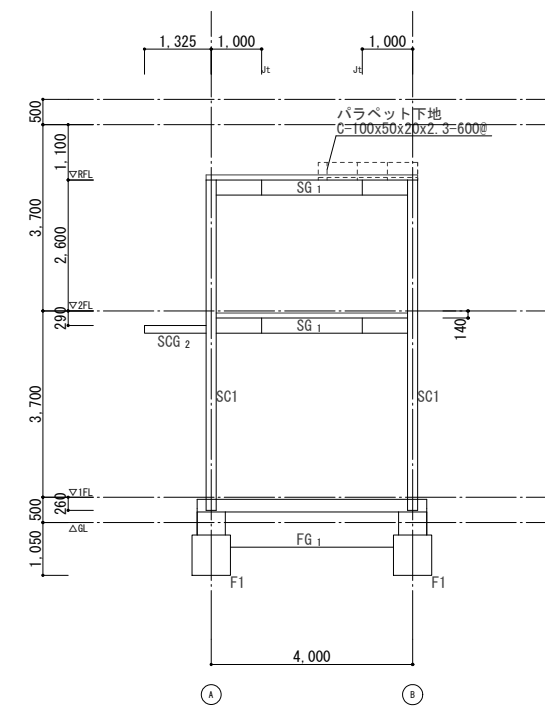
1. RFL=1FL+6.300
2. 床版は、ALC厚さ100mmとする。
3. ◎ 印は、剛接合を示す。

特記なき限り下記による

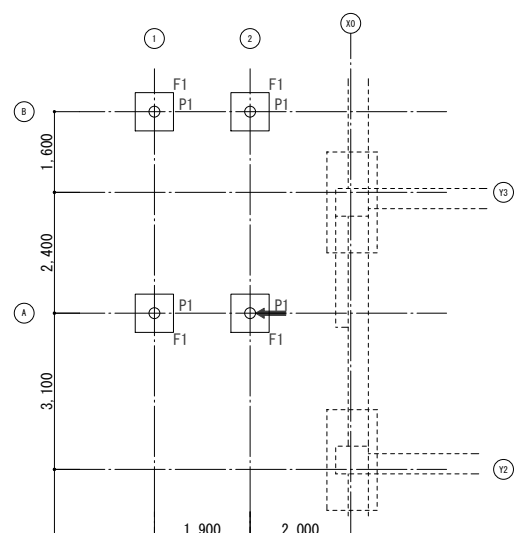
1. 大梁・小梁天端レベルは、FL±0とする。
2. ——— はLV16: JISターンバックル付ブレースM16を示す。



1通り軸組図 S=1/100



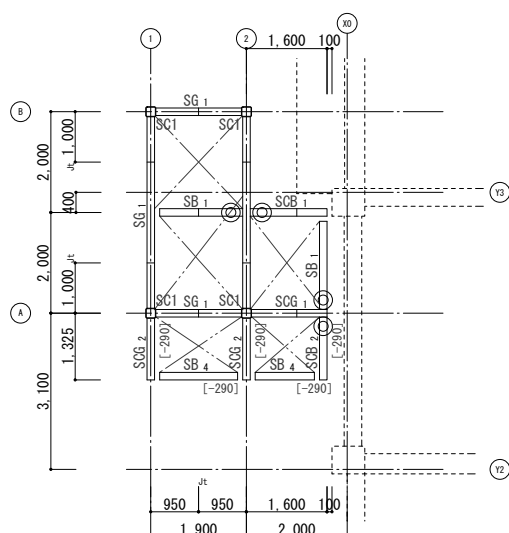
2通り軸組図 S=1/100



基礎伏図 S=1/100

特記事項

1. 1FL=00.00m(標高TP) GL=1FL-500
 - [] 内の数値は、杭天端レベルを示す。
() 内の数値は、基礎下端レベルを示す。
 - ← 印は、試験杭位置 (1ヶ所) を示す。
 - 杭打完了後、杭芯ズレ及び杭頭レベルを測定し、監督員に報告する。
 - 施工誤差の許容値は、杭芯ずれ100mmとする。
- 特記なき限り下記による
1. 杭頭天端レベルは、GL-900とする。
 2. 基礎下端レベルは、GL-1,050とする。



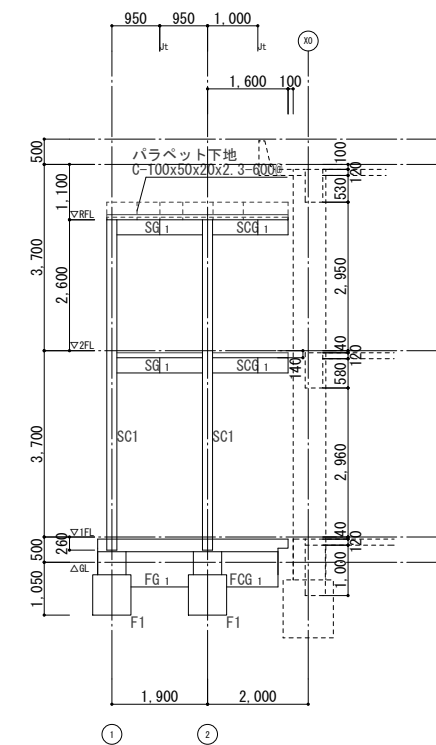
2階伏図 S=1/100

特記事項

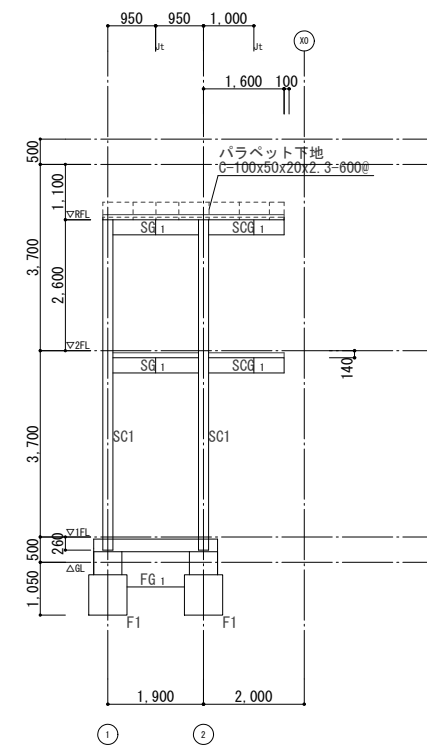
1. 2FL=1FL+3.700
2. 床版は、ALC厚さ100mmとする。
- [] 内の数値は、FLからの梁のレベルを示す。
- ◎ 印は、剛接合を示す。

特記なき限り下記による

1. 大梁・小梁天端レベルは、FL-140とする。
2. ——— はLV16: JISターンバックル付ブレースM16を示す。



A通り軸組図 S=1/100



B通り軸組図 S=1/100

特記事項

1. ■■■■■ は柱梁のふかし部分を示す。
- 特記なき限り下記による
1. 基礎梁天端レベルはFL-750とする。
 2. スラブ天端レベルはFL-30とする。

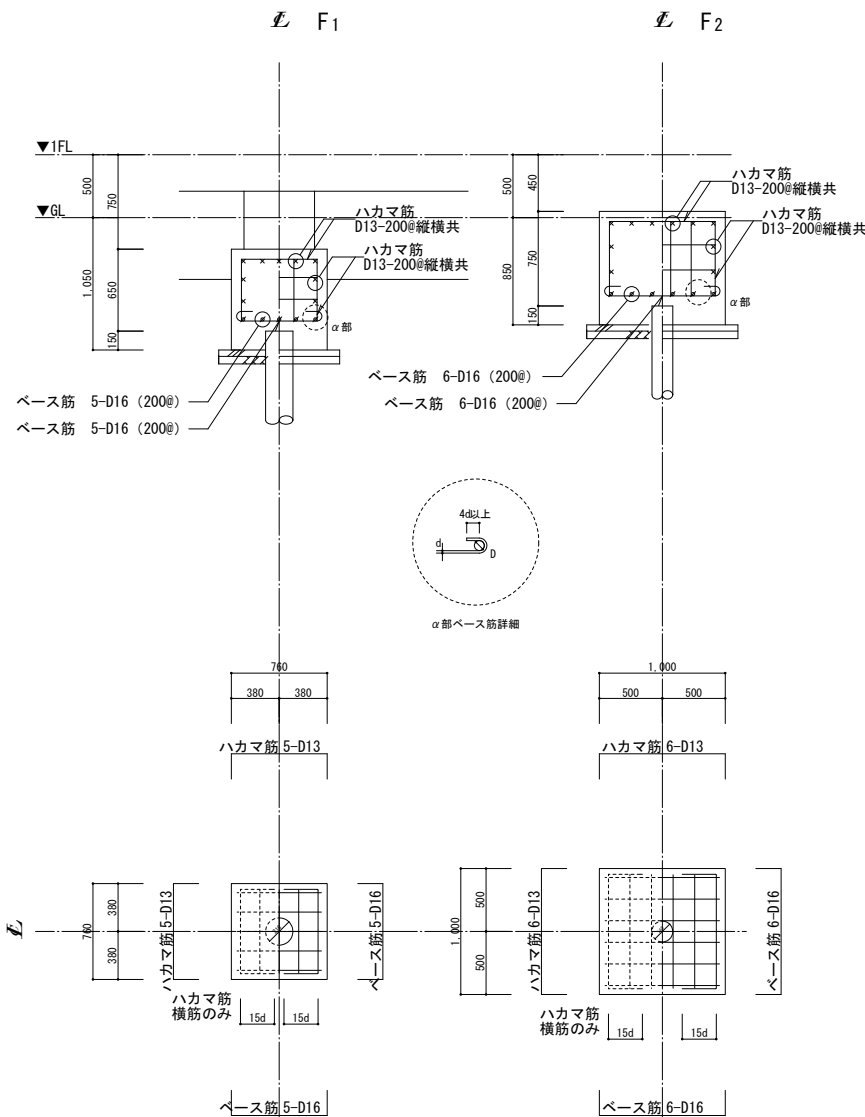
杭リスト S=1/40

杭工法	スクリーパイルEAZET工法 [(押し込み方向) 認定番号TACP-0635 先端地盤: 砂質地盤 (砂礫地盤含む)、(引抜き方向) 認定番号CBL FP004-07号]同等以上の工法とする。													
	符号	杭マーク	杭本体径 D(mm)	杭仕様		羽根		長期許容支持力 Ra (kN)	杭長 Ls (m)	本数	杭頭補強筋仕様鉄筋	溶接部長さ L (mm)	定着長さ (mm)	H (mm)
P1	○	φ216.3	t=8.2mm STK490 L=5.0m	t=8.2mm STK490 L=10.0m	φ650	t=28.0mm SM490A	298	15.0	4	6-D13 (SD295)	60以上	520以上	150	GL-900
P2	●	φ165.2	t=7.1mm STK490 L=5.0m	t=7.1mm STK490 L=10.0m	φ350	t=16.0mm SM490A	86	15.0	1	6-D13 (SD295)	60以上	520以上	150	GL-700

※杭長は、製品の長さを示す。施工長さは、支持層到達し所定の根入れを行った後の高止まりについては、杭頭をカットすること。(詳細は、特記事項による)

基礎断面リスト S=1/30

特記事項
1. 基礎フーチング内に貫通孔を設けないこと。



柱断面リスト S=1/30

特記事項
ダイアフラムは取付大梁フランジの2サイズUPとする。鉄骨材質はBCR295とする。

階	符号	SC1
2F	断面	
	鉄骨部材	□ - 200 x 200 x 9
1F	断面	
	鉄骨部材	□ - 200 x 200 x 9
柱脚		
	ベースプレート	360 x 360 x 28 アンカーボルト 4-M30 (BPM-SD490)
	コンクリート柱断面	560 x 560
	立上り筋	12-D16 (SD295)
	フープ筋	D13@100 (SD295)
	ベ-スバ-ック	20-09V

杭種: 鋼管杭

杭工法: 先端羽根付鋼管杭工法の場合 (先端支持力係数 $\alpha=300$ 以上の工法)

特記事項

・一般事項

- 本工法は、建築基準法に定められた特定埋込杭であり、建築基準法施行規則第1条の3第一項に大臣認定を受けたもので、支持算定方式における杭先端支持力係数 α が300以上のものを採用する。
- 杭の施工は、大臣認定を受けた杭施工業者が承認した施工会社の施工とし、
・監理技術者等は、基礎ぐい工事における杭の支持層への到達に責務を有すること
・元請建設業者は、下請人による杭の支持層への到達に係る技術的判断に対し、その適否を確認すること。

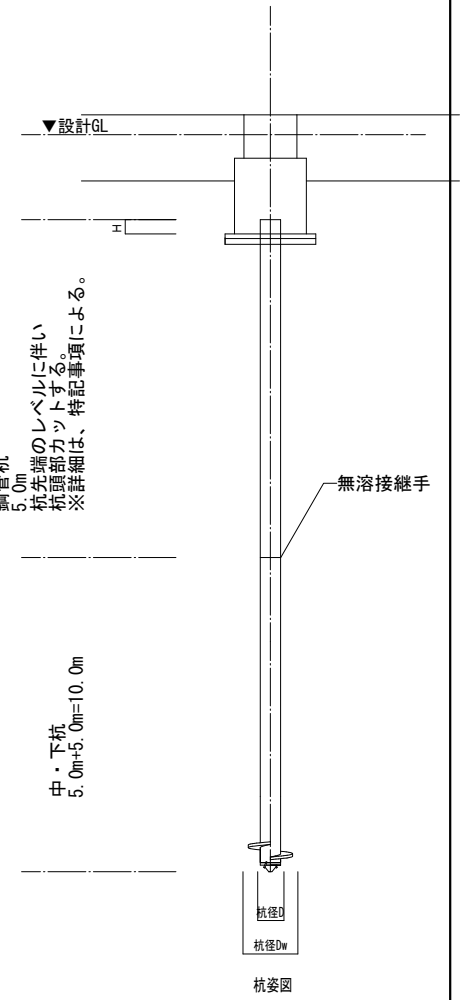
・材料

- 本工法に使用する鋼管杭は、一般構造用炭素鋼鋼管 (JIS G3444 STK400、STK490)、MSTL-0419 国土交通大臣認定 基礎ぐい用高張力鋼管 SEAH590 [STKT590] に該当するものとする。杭先端部についても同様なJIS規格品 (JIS G3106 SM490Aなど) に該当するものとする。

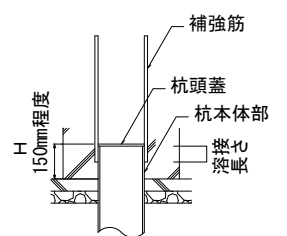
・施工

- 施工は、性能評価機関の評価を受けた評価条件に基づき施工する。
- 施工中は、性能評価における施工管理項目に示す事項について管理を行うものとする。
- 支持層の推定は、柱状図の支持層深度、施工時の回転トルクの変化、施工状況を総合的に判定し、支持層の推定/判断/確認を行うこと。
- 隣接構造物、隣接杭に影響しないように掘削する。許容傾斜角度を考慮して杭先端部が互いに接触する可能性がある場合は、施工順序を考慮した施工計画をたてる。
- 所定の杭先端レベルまで杭回転圧入を行う。それ以後で回転圧入が困難と判断された場合は、杭頭をカットする。杭頭をカットする場合は監督員及び工事監理者と協議を行い長さを決定する。杭先端レベルが著しく異なる場合には、監督員及び工事監理者と協議を行い、一旦引抜き、再度施工を行う等、適切な処置を検討する。
- 杭打完了後、杭芯ズレ及び杭頭レベルを測定し、監督員に報告する。

上杭鋼管杭 5.0m
中・下杭 5.0m+5.0m=10.0m
※杭頭レベルに併い杭先端部をカットする。杭頭詳細は、特記事項による。

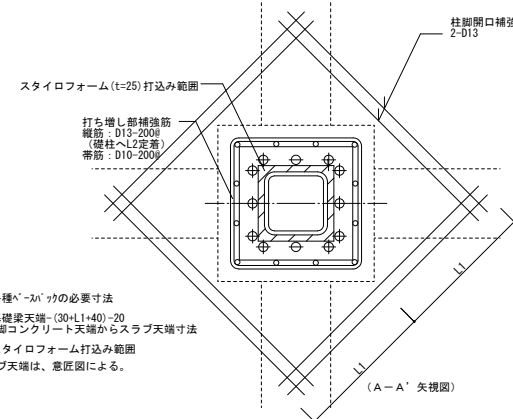


杭頭補強詳細図 S=1/40

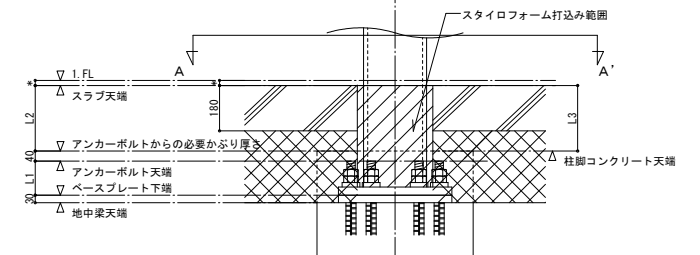


柱脚部詳細

・柱脚部については、基礎梁天端からアンカーボルトからの必要かぶり厚さまで (50+L1+40) をコンクリートで充填し、柱脚コンクリート天端からスラブ天端までの範囲にスタイロフォームを打込むこと。
・柱脚コンクリート天端とスラブ天端が同一レベルの場合は、スタイロフォームは打込まなくてよい。



※L1=各種ベ-スバ-ックの必要寸法
※L2=基礎梁天端-(30+L1+40)-20
柱脚コンクリート天端からスラブ天端寸法
※L3=スタイロフォーム打込み範囲
・スラブ天端は、意匠図による。



基礎梁断面リスト S=1/30

特記事項
 1. 左右の梁主筋については、可能な限り通し配筋とすること。
 2. 巾止め筋 D10-1,000@
 3. *寸法は、伏図・軸組図参照による。

階	符号	FG ₁	
		両端	中央
1F	位置		
	断面		
B×D		400×700	
主筋	上端筋	5-D19	5-D19
	下端筋	5-D19	5-D19
スターラップ		□-D13-#200	
腹筋		2-D13	
備考			

基礎小梁断面リスト S=1/30

特記事項
 1. 左右の梁主筋については、可能な限り通し配筋とすること。
 2. 巾止め筋 D10-1,000@
 3. *寸法は、伏図・軸組図参照による。

階	符号	FB ₁ FCB ₁	
		両端	中央
1F	位置		
	断面		
B×D		400×700	
主筋	上端筋	3-D19	3-D19
	下端筋	3-D19	3-D19
スターラップ		□-D13-#200	
腹筋		2-D13	
備考			

基礎片持ち梁断面リスト S=1/30

特記事項
 1. 左右の梁主筋については、可能な限り通し配筋とすること。
 2. 巾止め筋 D10-1,000@

階	符号	FCG ₁	
		基礎	先端
1F	位置		
	断面		
B×D		400×700	
主筋	上端筋	5-D19	3-D19
	下端筋	3-D19	3-D19
スターラップ		□-D13-#200	
腹筋		2-D13	
備考			

壁断面リスト S=1/30

特記事項 縦筋を外側とする。

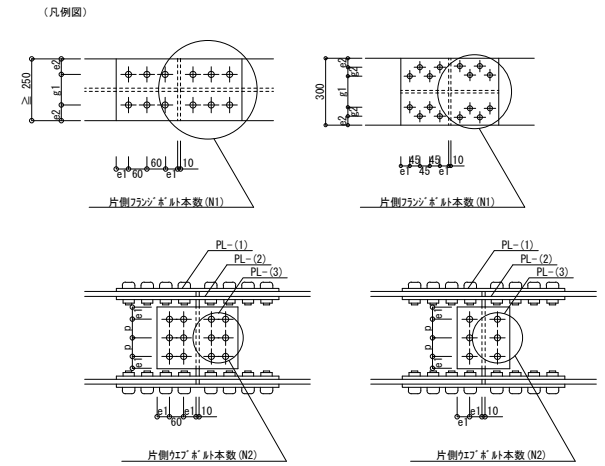
縦断面図		W15
縦筋		D10 - 150@ (タプルチドリ)
横筋		D10 - 150@ (タプルチドリ)
定着長さ		重ね継手はL1、定着長さはL2とする
開口補強筋	縦筋	1 - D13 (端部筋)
	横筋	—
	斜め筋	—

鉄骨大梁断面リスト S=1/30

特記事項
 特記なき鉄骨材質はSM400Bとする。ガセットプレートは母材と同等とする。
 特記なき鉄骨梁継手位置は伏図・軸組参照。ボルト材質はS10Tとする。

符号	SG1	
	端部	中央
RF 姿断面		
	鉄骨継手: SJ1	
部材(SIZE)	H - 300 x 150 x 6.5 x 9	H - 300 x 150 x 6.5 x 9
	Flange	2PL - 9 HTB. 4 - M20
継手	Web	2PL - 6 HTB. 2 - M20
	備考	
位置	端部	中央
	2F 姿断面	
部材(SIZE)		H - 300 x 150 x 6.5 x 9
継手	Flange	2PL - 9 HTB. 4 - M20
	Web	2PL - 6 HTB. 2 - M20
備考		

鉄骨大梁継手リスト



特記なき継り 高力ボルト: S10T

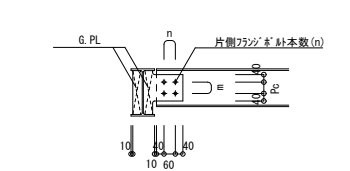
継手記号	フランジ		ウェブ		ピッチ、はしあき、ゲージ					備考
	外添板 PL-(1)	内添板 PL-(2)	N1-径	添板寸法 PL-(3)	N2-径	p	e1	e2	g1	
SJ1	PL-9 x 290	2PL-9 x 60	HTB. 4-M20	PL-6 x 200 x 170	HTB. 2-M20	120	40	30	90	—

鉄骨小梁断面リスト S=1/30

特記事項
 鉄骨材質はSM400Bとする。
 特記なき継りガセットプレートは母材と同等とする。ボルト材質はS10Tとする。

符号	SB1	SB2	SB3	SB4
	全断面	全断面	全断面	全断面
姿断面				
	鉄骨継手: SJ1			
部材	H - 300 x 150 x 6.5 x 9	H - 150 x 75 x 5 x 7	H - 100 x 100 x 6 x 8	H - 150 x 150 x 7 x 10
	フランジ	PL - 9 HTB. 3 - M16	PL - 6 HTB. 2 - M16	PL - 6 HTB. 2 - M16
継手	ウェブ	PL - 9 HTB. 3 - M16	PL - 6 HTB. 2 - M16	PL - 9 HTB. 2 - M16
	備考			

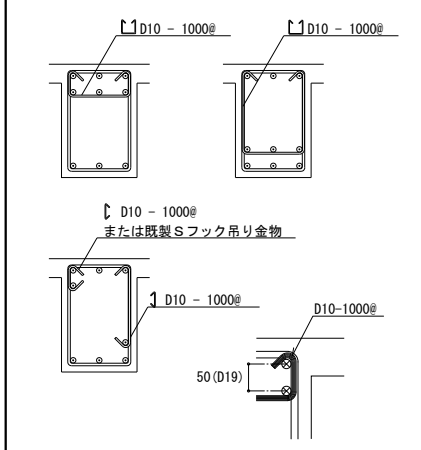
鉄骨小梁継手リスト



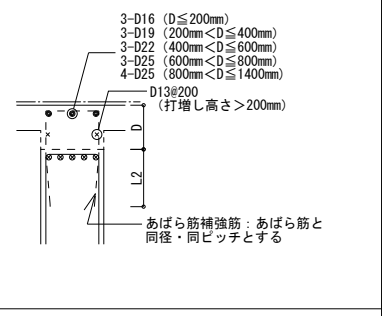
特記なき継り 高力ボルト: S10T 鉄骨材質: スプラインプレートは母材と同等とする。特記なき継り1面せん断とする。

部材	ウェブ継手				
	H.T.B(n)	m x n	Pc(mm)	G.PL	備考
H - 300 x 150 x 6.5 x 9 (SB1)	3 - M16	3 x 1	60	PL - 9	
H - 150 x 75 x 5 x 7 (SB2)	2 - M16	1 x 2	60	PL - 6	
H - 100 x 100 x 6 x 8 (SB3)	2 - M16	1 x 2	60	PL - 6	
H - 150 x 150 x 7 x 10 (SB4)	2 - M16	1 x 2	60	PL - 9	

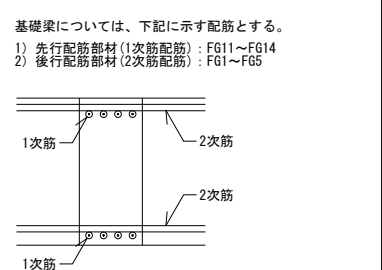
二段筋保持詳細図



躯体打増し部配筋図



梁主筋配筋要領



床版断面リスト

符号	床版厚	位置	主筋 短辺		配力筋 長辺	
			端部	中央	端部	中央
S18	180	上端筋	D13 - 200@	D10D13 - 200@		
		下端筋	D10D13 - 200@	D10 - 200@		
CS18	180	上端筋	D13 - 200@	D10 - 200@		
		下端筋	D13 - 200@	D10 - 200@		
FS20	200	上端筋	D13 - 200@	D13 - 200@		
		下端筋	D13 - 200@	D13 - 200@		

鉄骨片持ち梁断面リスト S=1/30

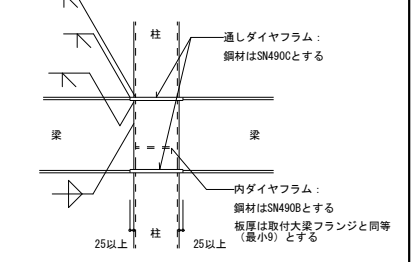
特記事項
 鉄骨材質はSM400Bとする。
 特記なき継りガセットプレートは母材と同等とする。ボルト材質はS10Tとする。

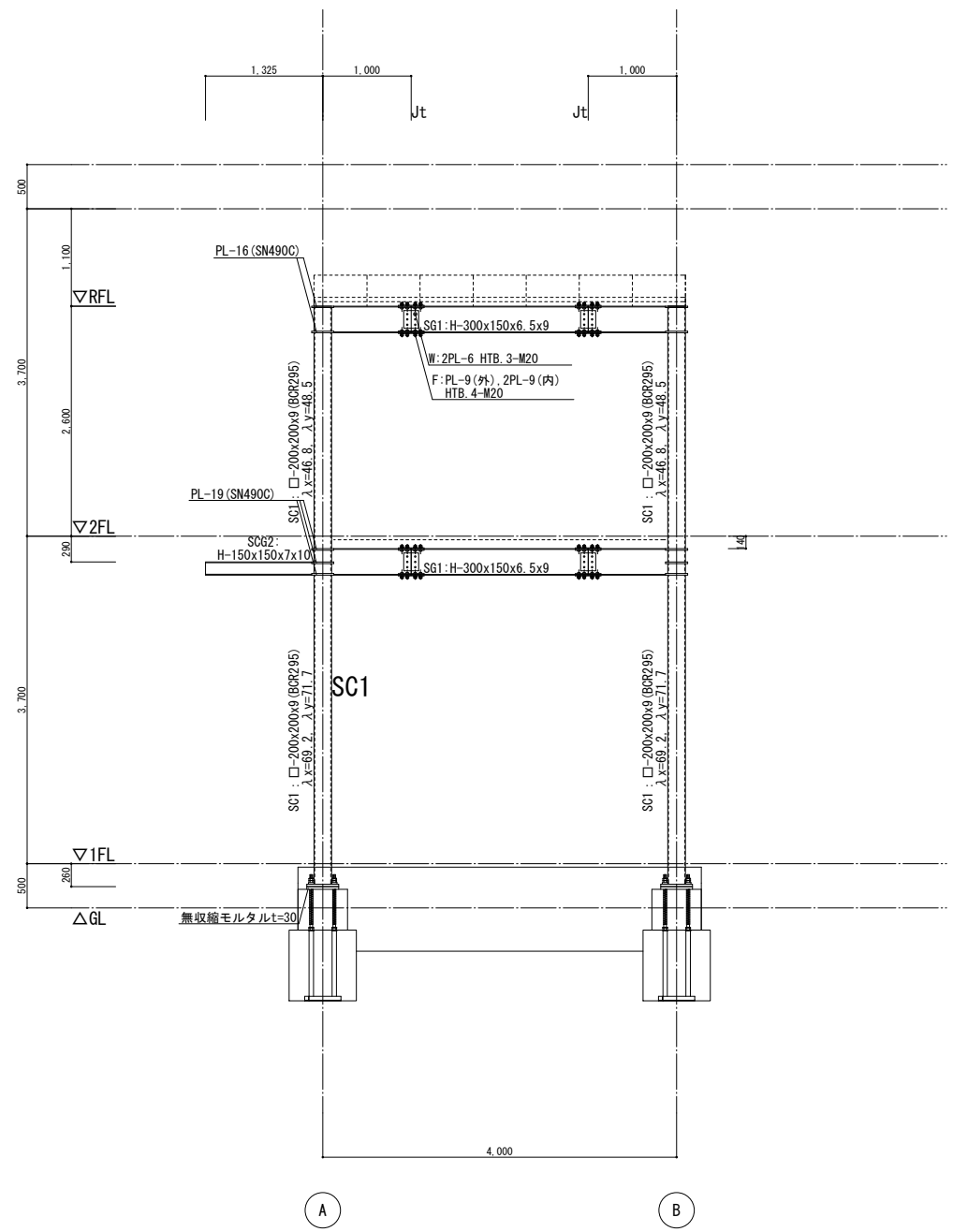
符号	SCG1, SCB1	SCG2	SCB2
	全断面	全断面	全断面
姿断面			
	鉄骨継手: SJ1		
部材(SIZE)	H - 300 x 150 x 6.5 x 9	H - 150 x 150 x 7 x 10	BH - 150 x 150 x 6 x 9
	Flange	2PL - 9 HTB. 4 - M20	
継手	Web	2PL - 6 HTB. 2 - M20	
	備考		

水平ブレースリスト

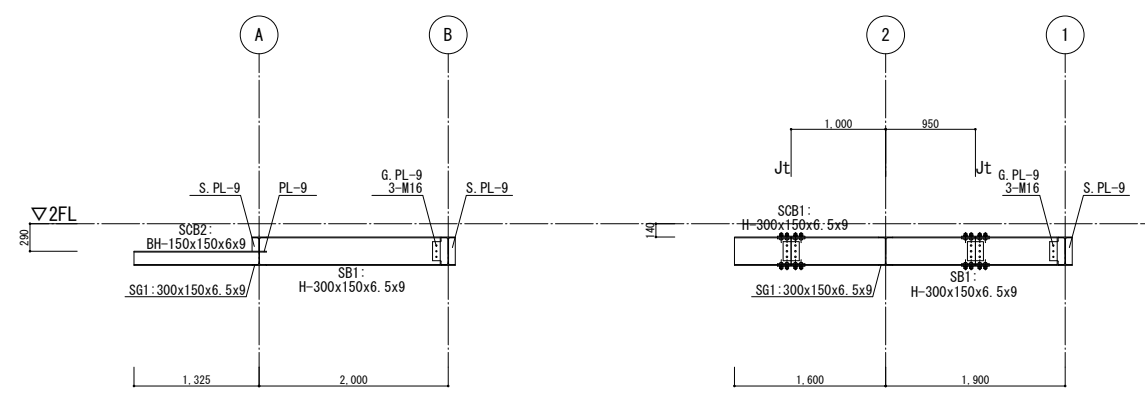
符号	LV16
断面	JISターンパクル筋かい
部材	1-M16
端部仕様	PL-9 HTB 1 - M16
備考	G.PLの必要幅B ≥ 70 必要溶接長L ≥ 80 ※両側隅肉溶接とする。

柱梁仕口リスト

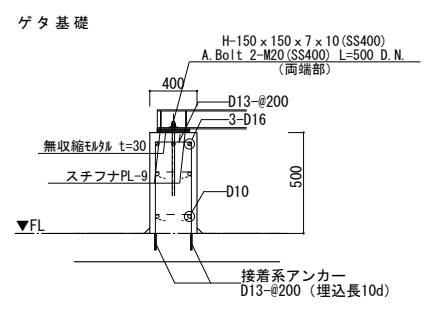




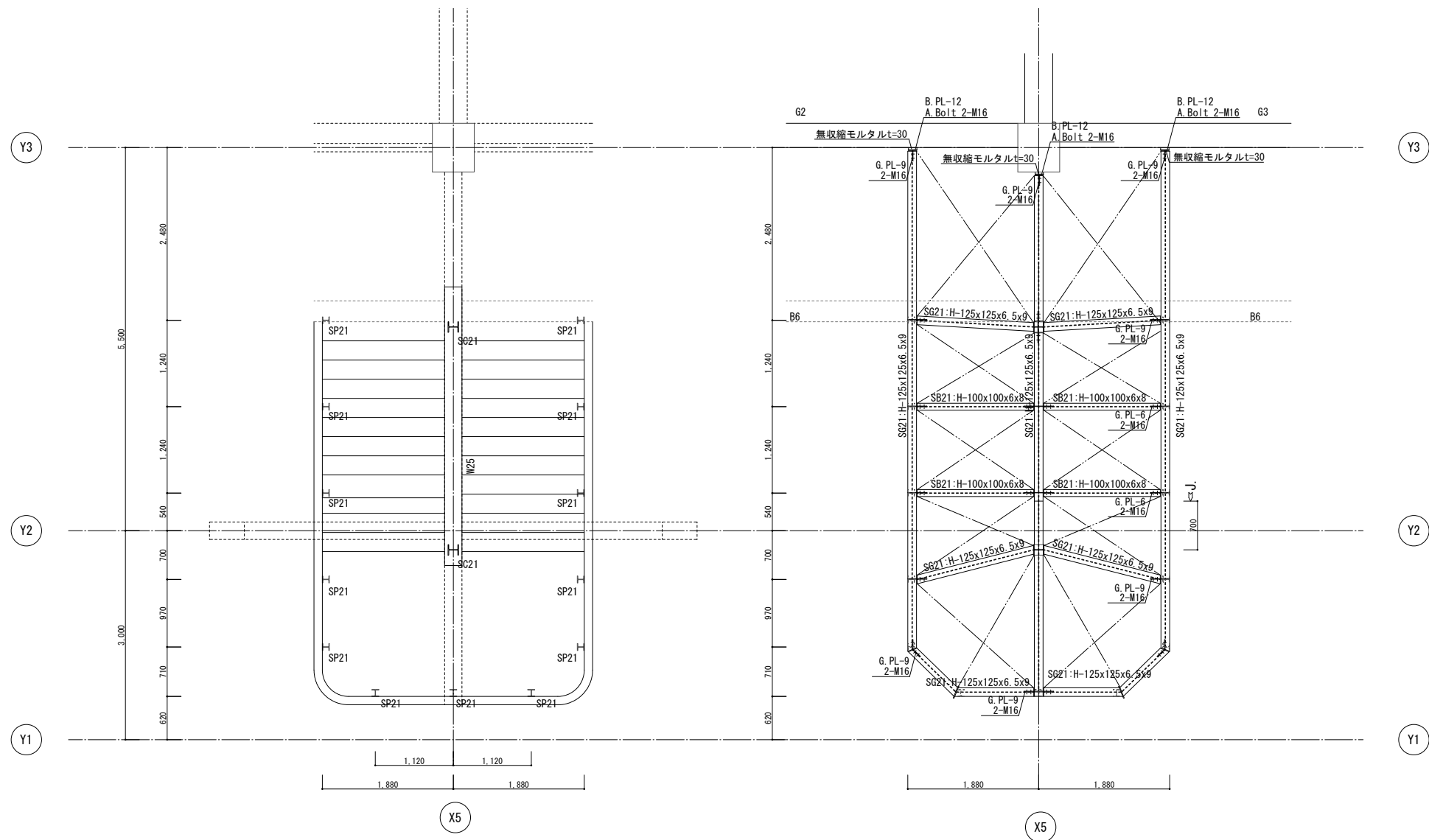
鉄骨架構詳細図 S=1/40



鉄骨片持ち小梁詳細図 S=1/40

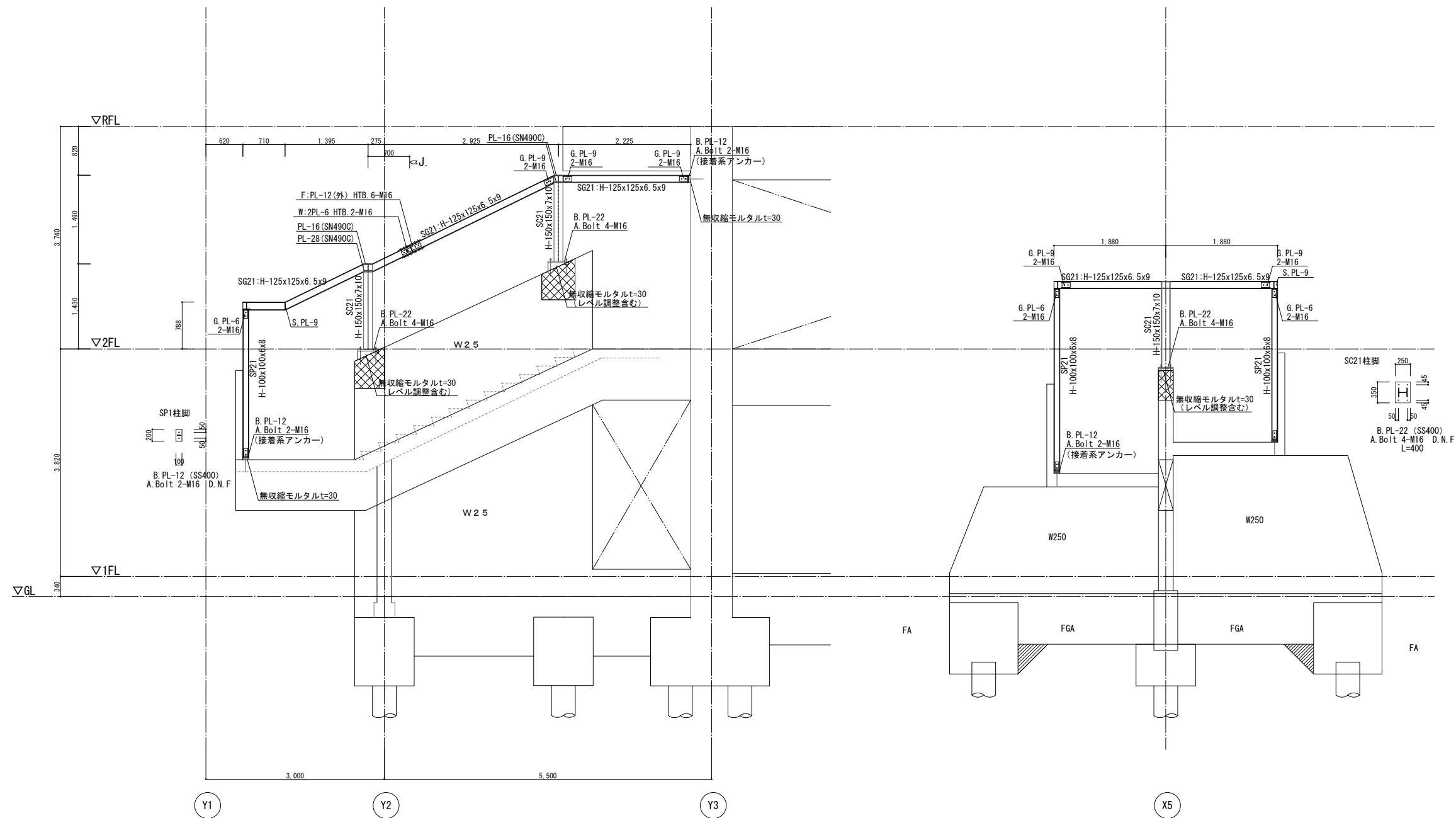


機械設備基礎配筋詳細図 S=1/40



階段屋根鉄骨詳細図(1) S=1:40

特記事項
 LV12 : JISターナックル付ブレースM12を示す



階段屋根鉄骨詳細図(2) S=1:40

研り(鉄筋残し)範囲を示す。アンカーボルト設置後、コンクリート打設

鉄骨柱断面リスト S=1/30

特記事項
特記なき鉄骨材質はSS400とする。
特記なきダイアフラムは取付大梁フランジの2サイズUPとする。

符号	SC21
MF	
鉄骨部材	H - 150x150x7x10
柱脚断面	
ベースプレート	250x350x22
アンカーボルト	4-M16 L=400 (SS400)
備考	-

鉄骨大梁断面リスト S=1/30

特記事項
特記なき鉄骨材質はSN400Bとする。ガセットプレートは母材と同等とする。
特記なき鉄骨梁継手位置は、柱芯から1,000mmとする。ボルト材質はS10Tとする。
スタッドボルトを設けること。

符号	SG21	
位置	端部	中央
断面		
鉄骨継手	SJ21	
部材 (SIZE)	H - 125 x 125 x 6.5 x 9	H - 125 x 125 x 6.5 x 9
継手	Flange	2PL - 12 HTB. 6 - M16
手	Web	2PL - 6 HTB. 2 - M16
備考		

小梁断面リスト S=1/30

特記事項
鉄骨材質はSN400Bとする。ガセットプレートは母材と同等とする。
ボルト材質はS10Tとする。

符号	SB21
断面	
部材	H - 100x 100 x 6 x 8
継手	フランジ
手	ウェブ
備考	PL - 6 HTB. 2 - M16

水平ブレースリスト

特記事項
1. 鉄骨材質はSS400とする。
2. ガセットプレートはSS400とする。
3. ボルト材質はS10Tとする。

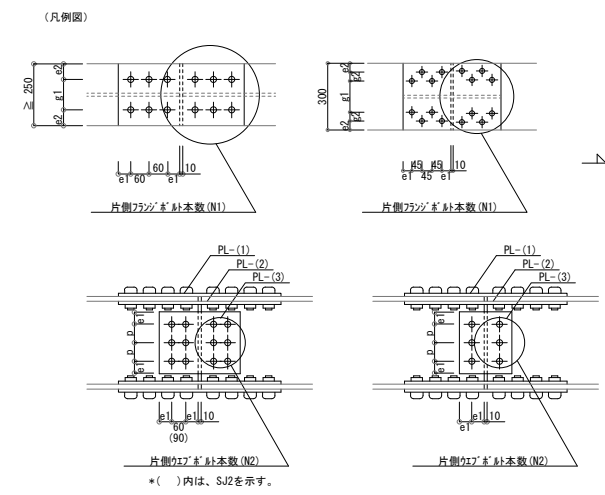
符号	LV12
断面	JISターンバックル筋かい
部材	1-M12
端部仕様	PL-6 HTB 1 - M16
備考	G. PLの必要幅B ≥ 60 必要溶接長L ≥ 60 ※両側隅肉溶接とする。

ポストリスト S=1/30

特記事項
鉄骨材質はSN400Bとする。
ガセットプレートは母材と同等とする。ボルト材質はS10Tとする。

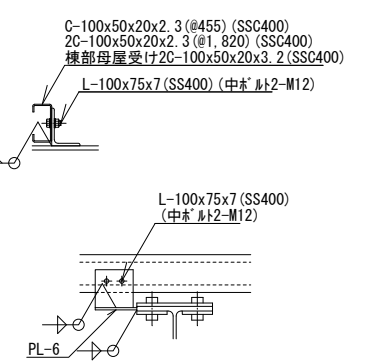
符号	SP21
断面	
部材	H - 100x 100 x 6 x 8
継手	フランジ
手	ウェブ
備考	B. PL-12 A Bolt 2-M16

鉄骨大梁継手リスト

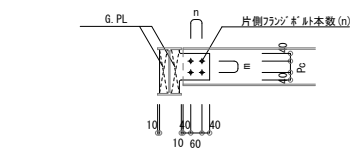


継手記号	外添板 PL-(1)	内添板 PL-(2)	N 1 - 径	添板寸法 PL-(3)	N 2 - 径	ピッチ、はしあき、ゲージ	備考
SJ21	PL-12 x 410	-	HTB. 6-M16	PL-6 x 80 x 350	HTB. 2-M16	p e1 e2 g1 g2	

母屋取付詳細 S=1:10

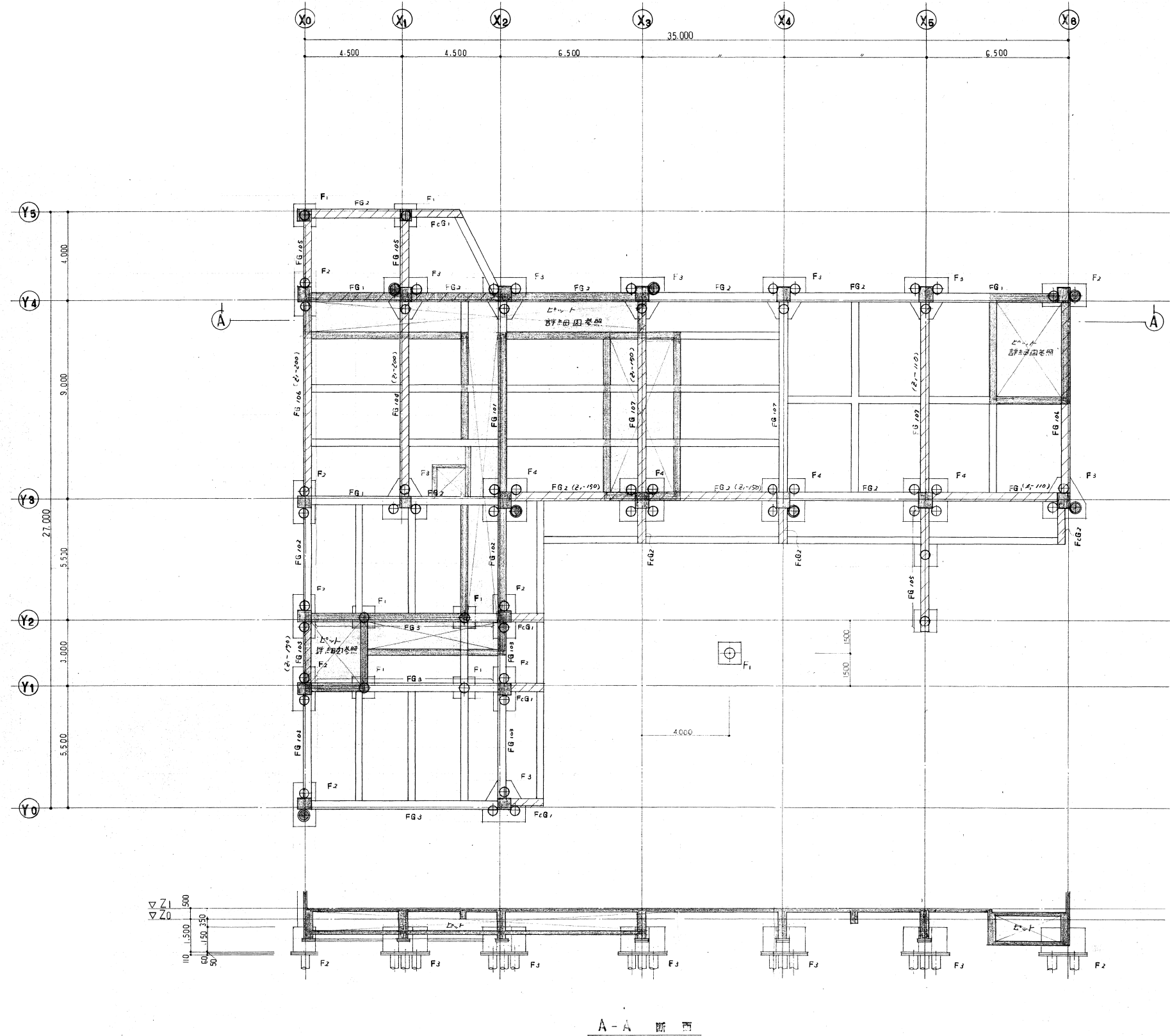


鉄骨小梁継手リスト



特記なき限り 高力ボルト: S10T 鉄骨材質: スプラインプレートは母材と同等とする。
特記なき限り1面せん断とする。

部材	ウェブ継手				
	H, T, B (n)	m x n	Pc (mm)	G. PL	備考
H-125 x 125 x 6.5 x 9 (SG21)	2 - M16	1 x 2	60	PL - 9	
H-100 x 100 x 6 x 8 (SB21)	2 - M16	1 x 2	60	PL - 6	



共通事項

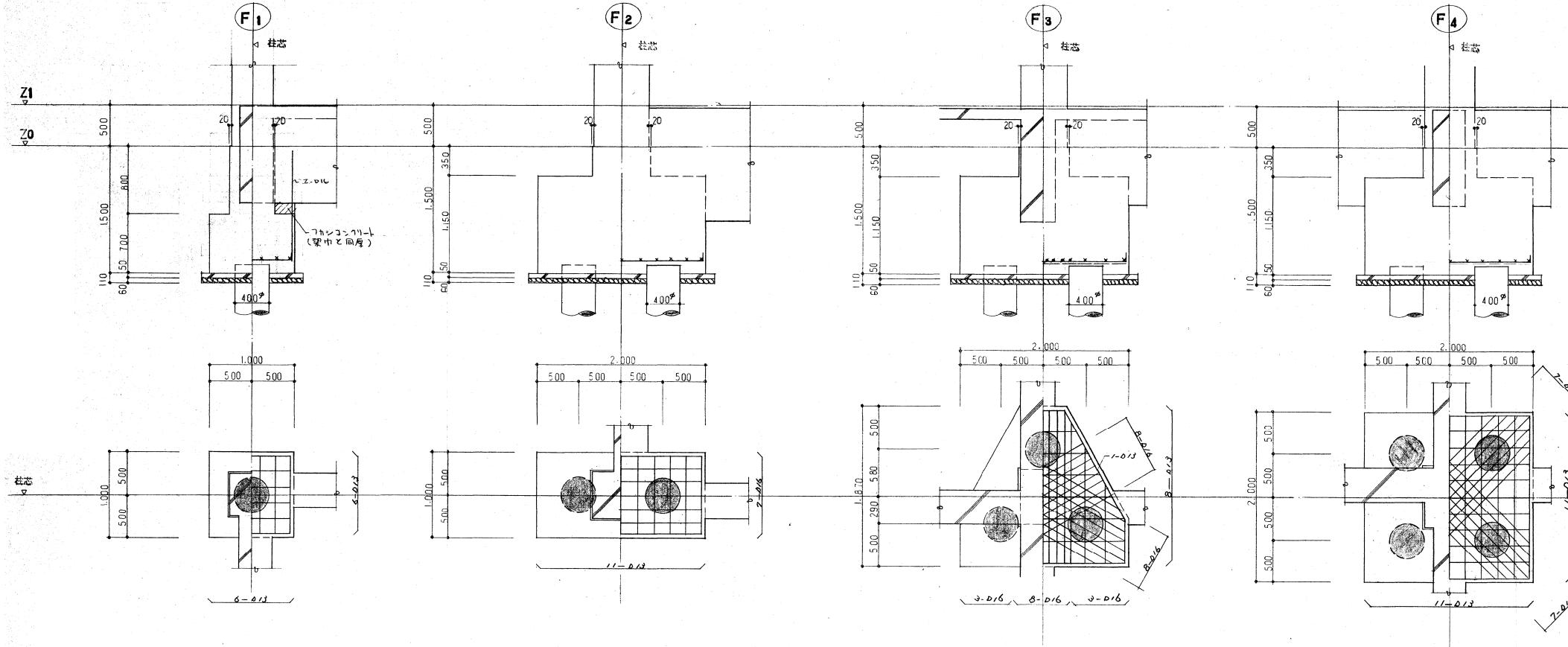
- 1) 梁の加工部、記入部は100(2-400)とする
- 2) 筋配の部、基礎は幅10(20-1500)とする
- 3) 鉄筋の部、基礎は幅10(20-1500)とする

仕様

- 1) J-711-F — Fc=210kg/cm² (4層強度)
- 2) 鉄筋 — SD-30 (D10~D25)
- 3) 杭 — T-17L-T-110⁹L-900⁹
 層別 Ra=60t/本 (表層)
 長さ 27m (9+9+9) — 58本
 長さ 28m (9+9+10) — 7本 (試験杭)
 試験杭は本杭に使用可。

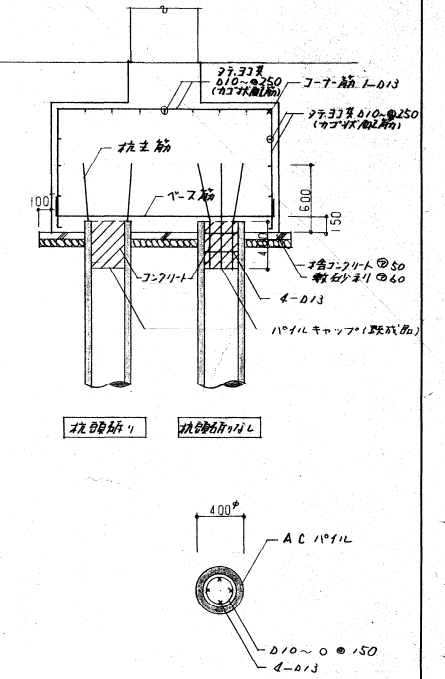
基礎伏図 S=1:100

基礎詳細図 S=1:30



共通事項

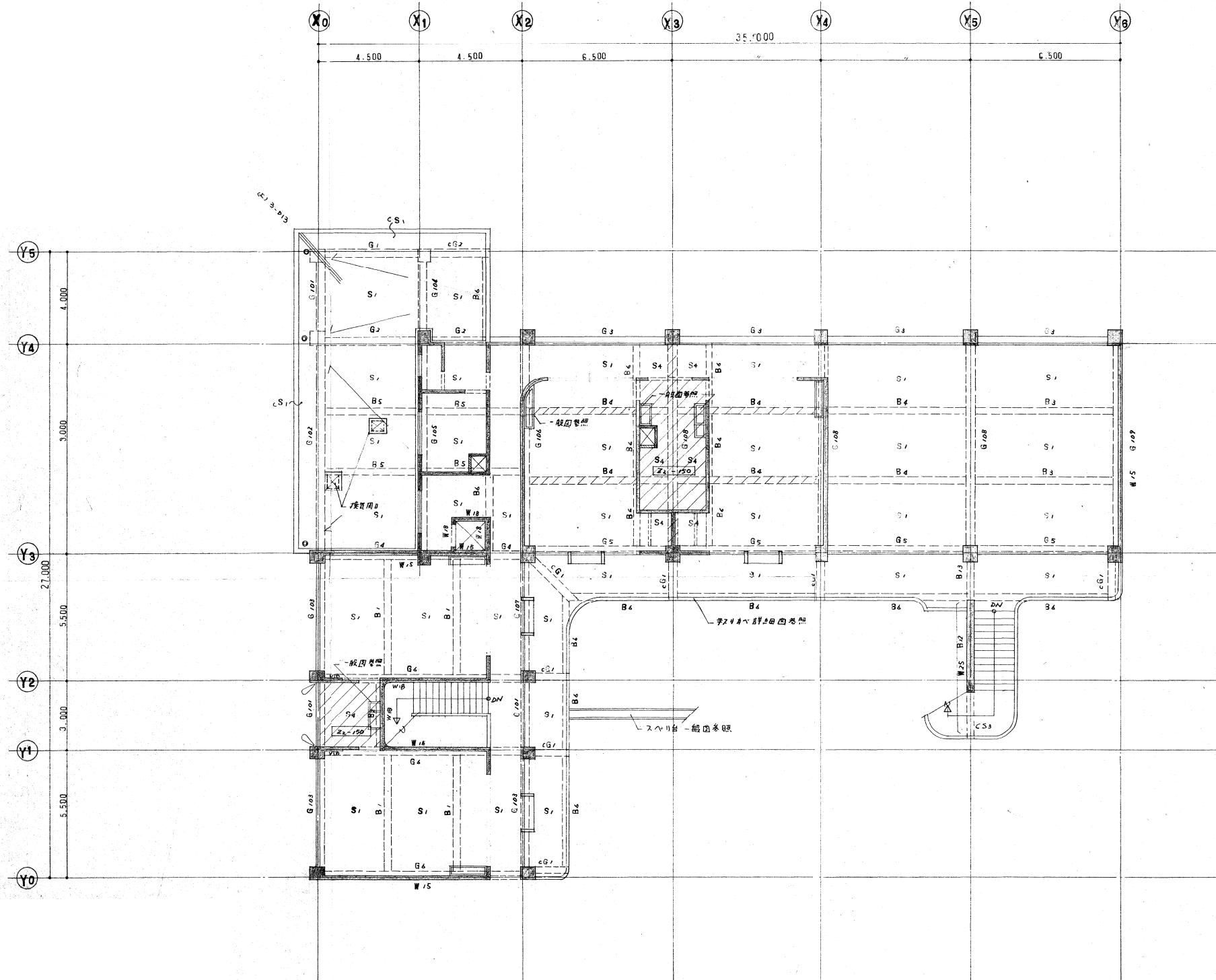
1) 杭頭処理はフーチング内鉄筋は下図による。



地中梁 リスト S=1:30

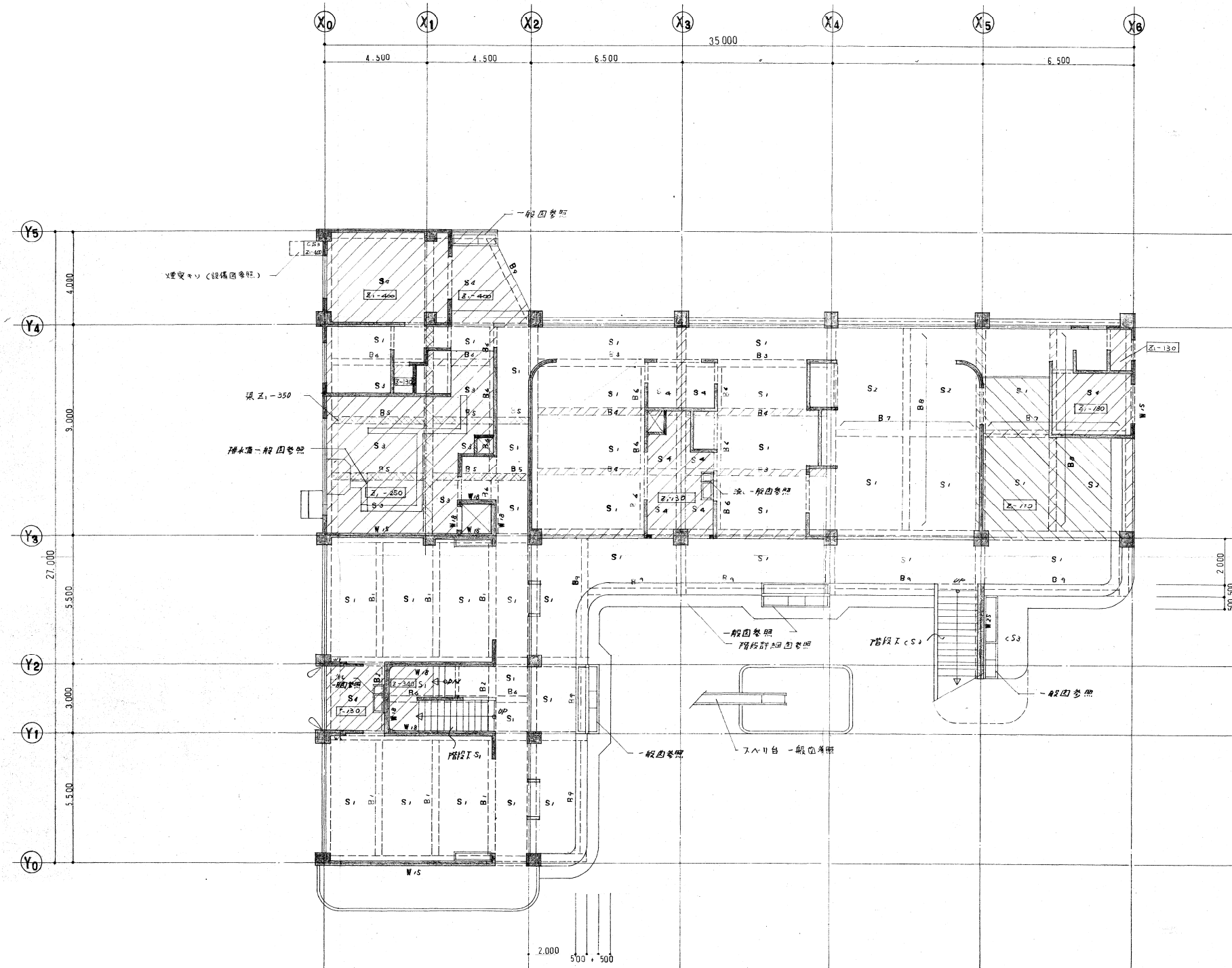
<p>FG1</p> <p>外端 中央 内端 4-022 J-022 4-022</p>			<p>FG2</p> <p>両端 中央 4-022 J-022</p>			<p>FG3</p> <p>X0端 中央 X2端 4-022 J-022 4-022</p>			<p>FCG1</p> <p>全筋 4-022</p>			<p>FCG2</p> <p>全筋 5-025</p>			<p>共通事項</p> <p>1) 4号鉄筋は引下用による。</p>					
<p>FG101</p> <p>Y3端 中央 Y4端 5-025 J-025 4-025</p>			<p>FG102</p> <p>Y2端 中央 Y3端 J-025 J-025 5-025</p>			<p>FG103</p> <p>全筋 J-025</p>			<p>FG104</p> <p>Y3端 中央 Y4端 4-025 J-025 5-025</p>			<p>FG105</p> <p>全筋 5-025</p>			<p>FG106</p> <p>両端 中央 5-025 J-025</p>			<p>FG107</p> <p>Y3端 中央 Y4端 4-025 5-025 4-025</p>		

46-21



- 共通事項**
- 1) コーキング表示、押込125/125 W12とする。
 - 2) 2L壁とする。
 - 3) 2L壁の隅壁を示す。
 - 4) コーキング170/170埋込みW10とする。
 - 5) 床板厚27.5mm 配入125/125 (E2-40)とする。
 - 6) 175/27.5床板厚27.5mm E2-110~130とする。

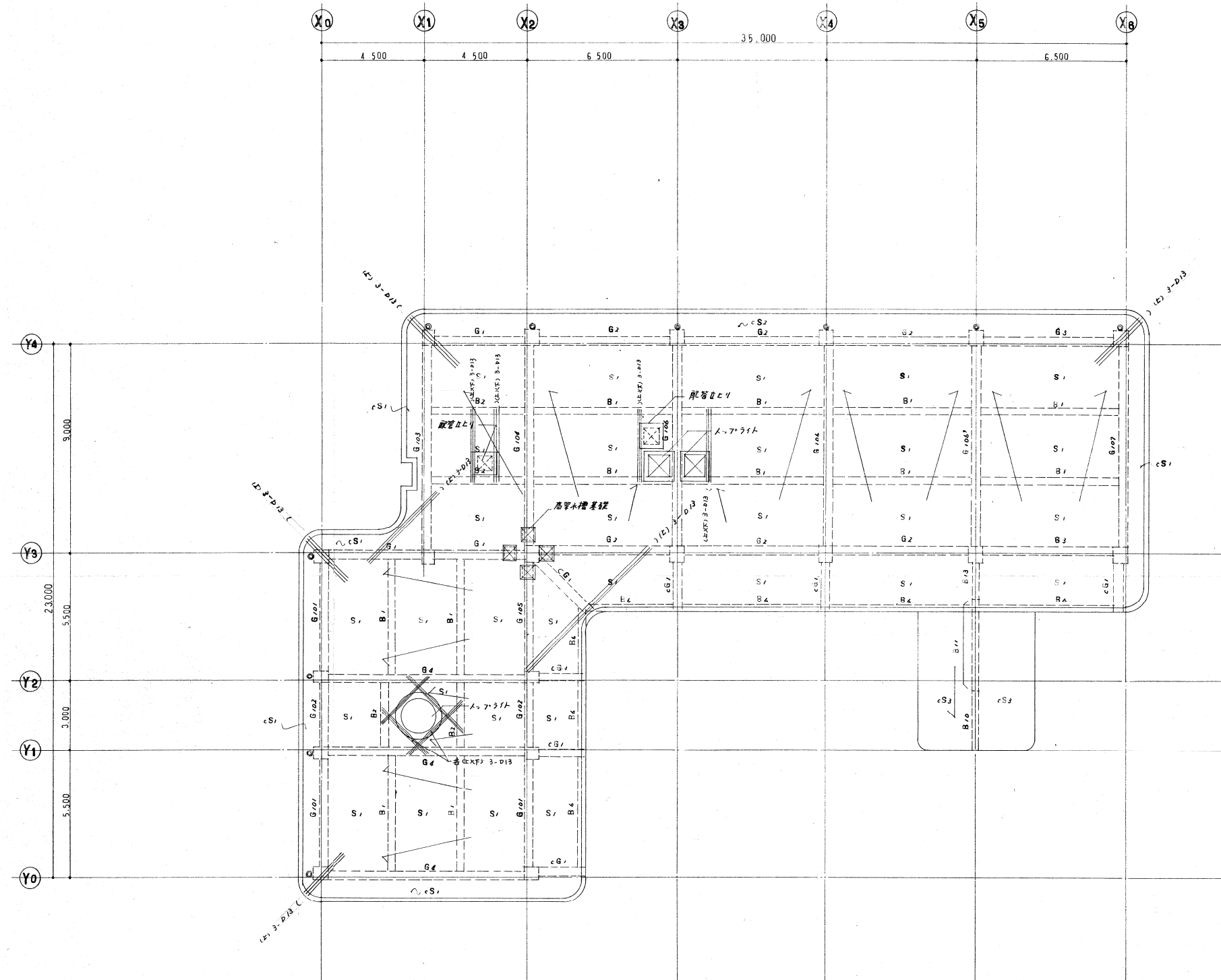
2階伏図 S=1:100



- 共通事項
- 1) ジョイント型を示し#8C12を12H W11とす。
 - 2) 2L壁を示す。
 - 3) 2L壁の厚壁を示す。
 - 4) ジョイント70~7壁を示しW10とす。
 - 5) 床加算R+Eを1記入121 (R1-40)とす。
 - 6) 722床下R12 R1-110~130とす。
 - 7) 722床下R4 R2-500とす。

1階 単図 S=1:100

46-22



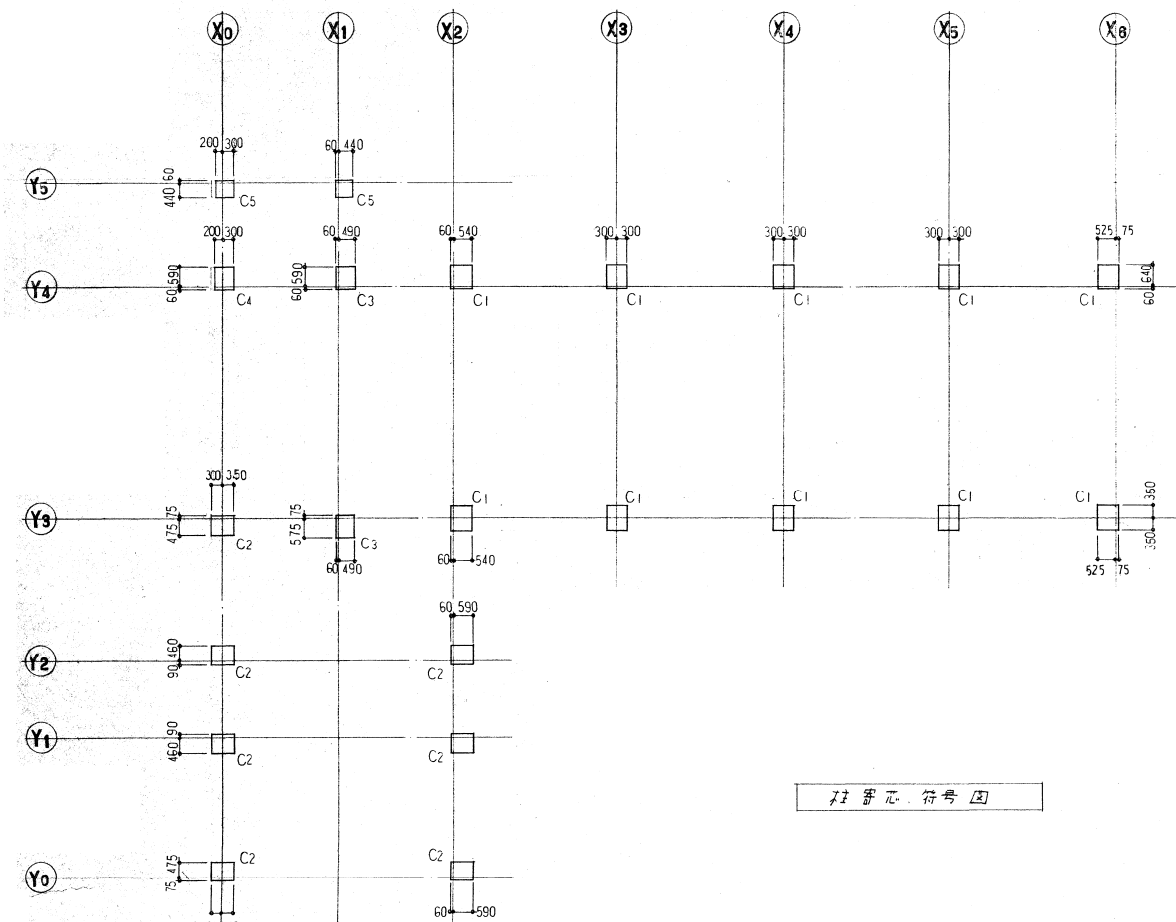
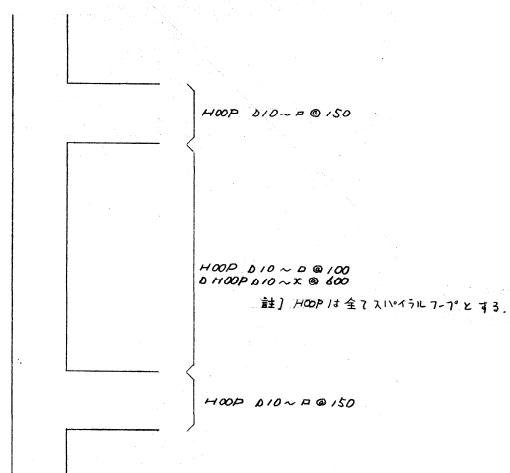
R階伏図 S=1:100

46-24

柱 リスト S=1:30

	C1	C2	C3	C4	C5
2 階					
1 階					

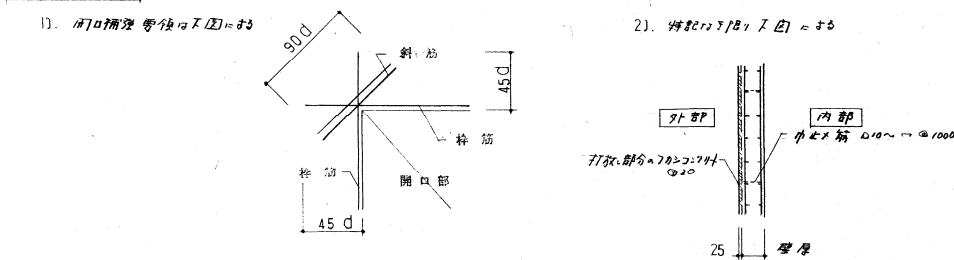
共通事項



壁配筋表 S=1:30

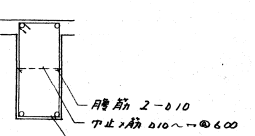
符号	W10	W12	W15	W18	W25	BW10
断面						
上部筋	$\phi 10 \sim \phi 250$ (2.7H)	$\phi 10 \sim \phi 200$ (2.7H)	$\phi 10 \sim \phi 250$ (2.7H)	$\phi 10 \sim \phi 200$ (2.7H)	$\phi 10 \sim \phi 200$ (2.7H)	$\phi 10 \sim \phi 400$ (2.7H)
下部筋	$\phi 10 \sim \phi 250$ (2.7H)	$\phi 10 \sim \phi 200$ (2.7H)	$\phi 10 \sim \phi 250$ (2.7H)	$\phi 10 \sim \phi 200$ (2.7H)	$\phi 10 \sim \phi 200$ (2.7H)	$\phi 10 \sim \phi 400$ (2.7H)
開口部						
上部筋	1-D13	1-D13	2-D13	2-D16		1-D13
下部筋	1-D13	1-D13	2-D13	2-D16		1-D13

共通事項

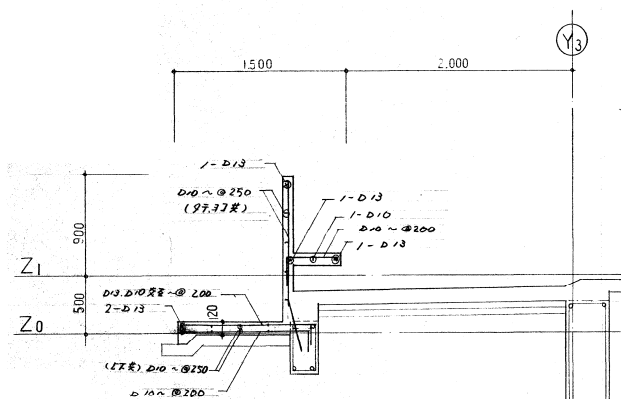


大梁 リスト 5=1:30

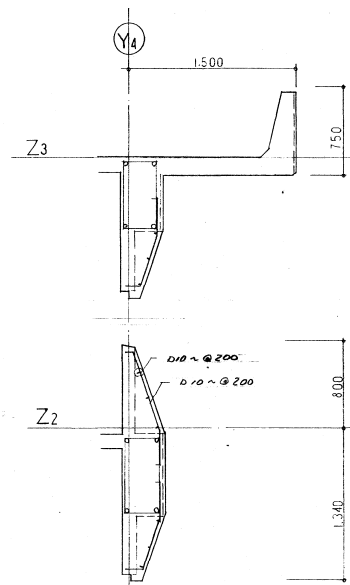
階	R	G1	G2	G3	G4			CG1	
		G101	G102	G103	G104	G105	G108	G107	G106'
階	2	G1	G2	G3	G4	G5	G6		
		G101	G102	G103	G104	G105	G108	G107	G108
		G109			CG1	CG2			共通事項

共通事項
 11. 詳細は、梁リストに示す。

 梁筋 2-φ10
 下止筋 φ10~φ200
 J.T φ10~φ150

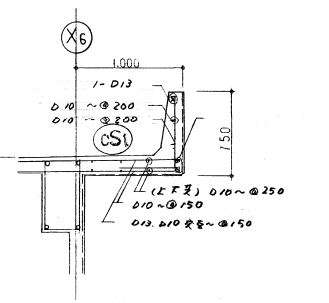
B1	B2	B3	B4	B5	B6	B7	B8
<p>両端 中央</p>	<p>全筋</p>	<p>X2 端外端 中央 X3 端内端</p>	<p>両端 中央</p>	<p>全筋</p>	<p>全筋</p>	<p>X4 端 中央 X5 端</p>	<p>両端 中央</p>
<p>B9</p>	<p>元端 先端</p>	<p>全筋</p>	<p>全筋</p>	<p>全筋</p> <p>S.1 D10 ~ D 100</p>	<p>共通事項</p> <p>1. 4% 配筋率 以下 1/10 以下</p>		



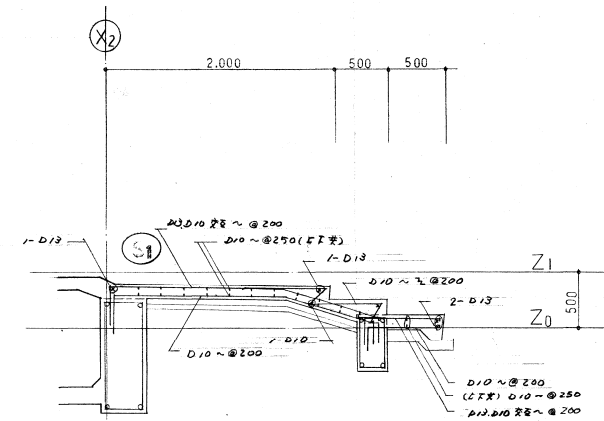
ガラス手洗流 配筋詳細図 S=1:30



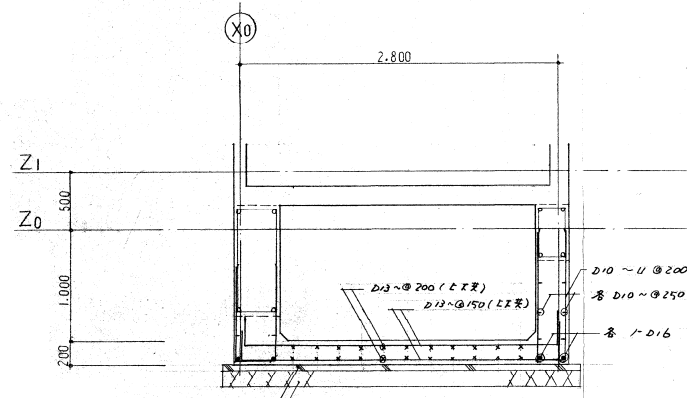
ガラスパネル 配筋詳細図 S=1:30



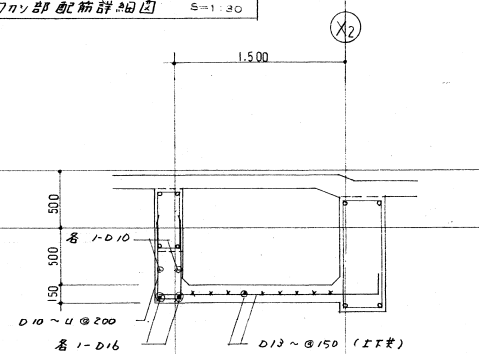
ガラスパネル 配筋詳細図 S=1:30



ガラス階段 配筋詳細図 S=1:30



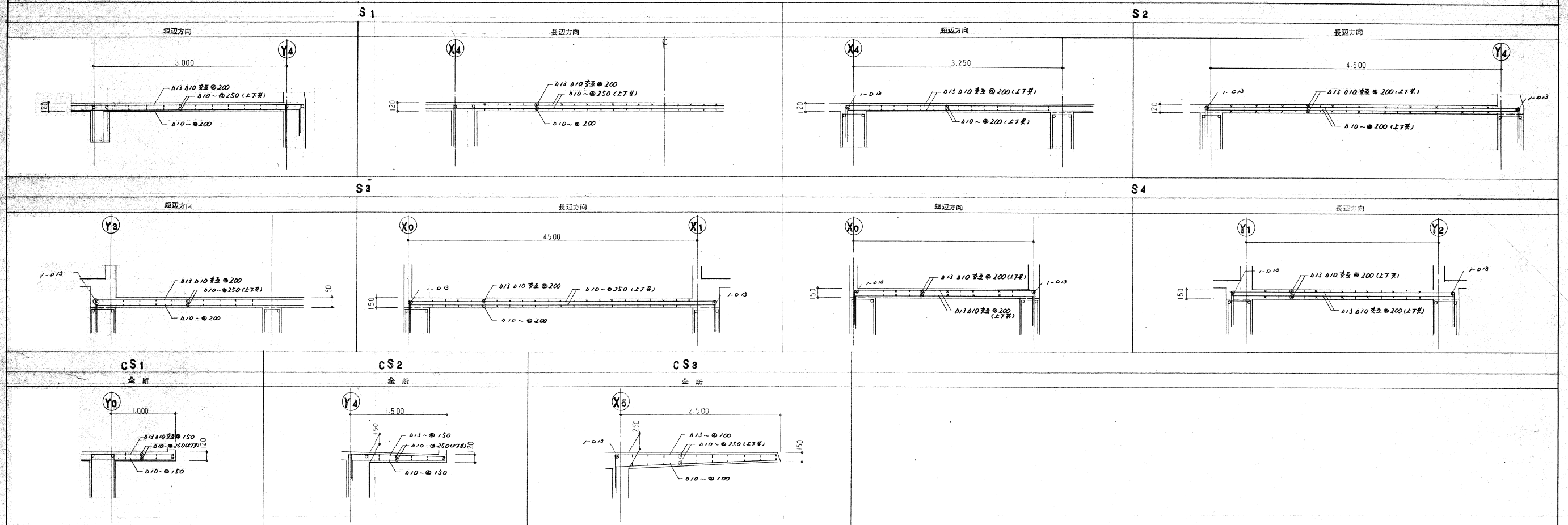
ガラスパネル 配筋詳細図 S=1:30



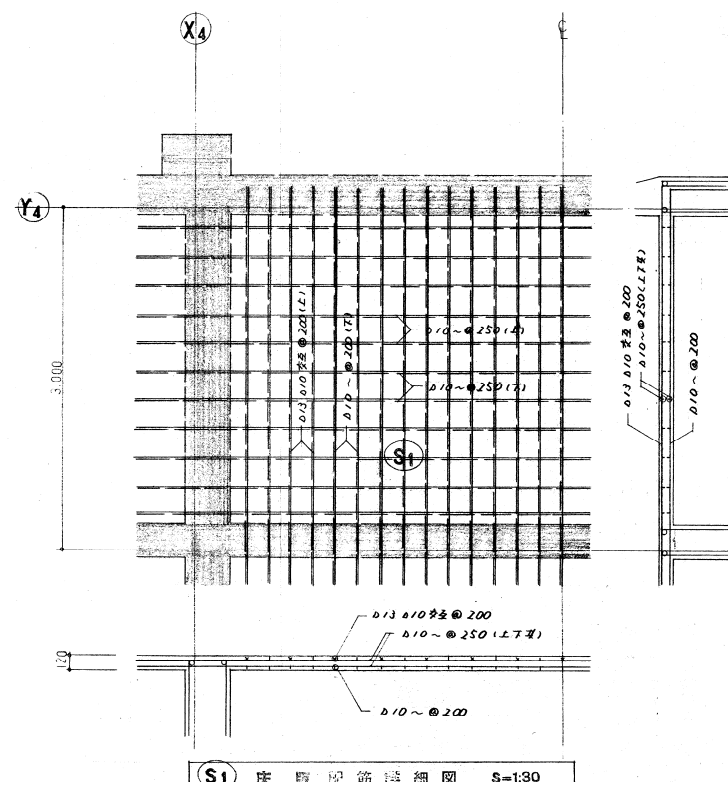
ガラスパネル 配筋詳細図 S=1:30

床版断面図

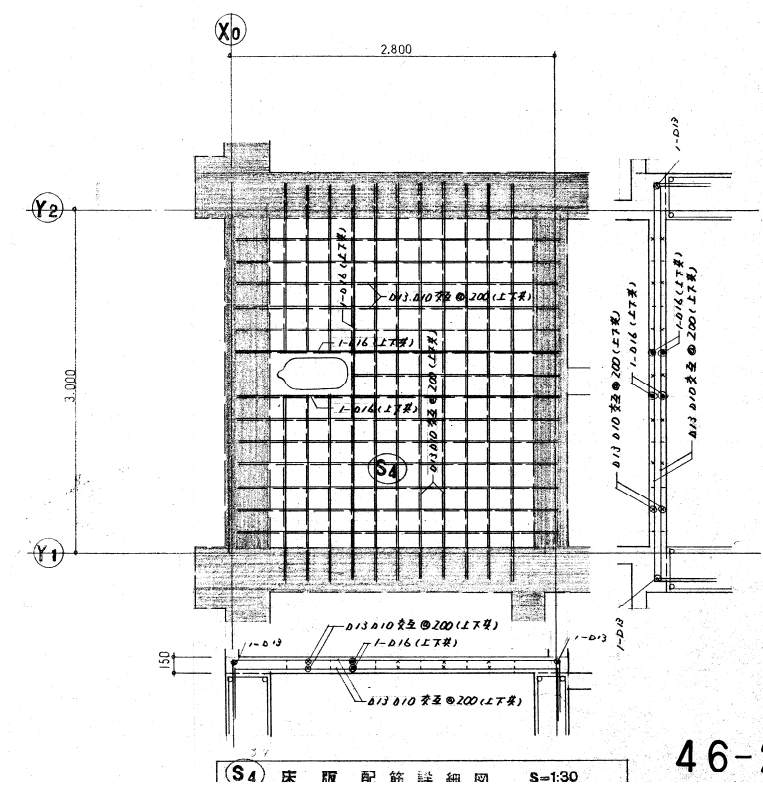
S=1:30



床版配筋表		主筋方向		配筋方向		切当
版符号	版厚	側部	中央	側部	中央	
S1	120	0.13, 0.10 交互 @ 200		0.10 ~ @ 250		
		0.10 ~ @ 200		0.10 ~ @ 250		
S2	120	0.13, 0.10 交互 @ 200		0.10 ~ @ 200		
		0.13, 0.10 交互 @ 200		0.10 ~ @ 250		
S3	150	0.13, 0.10 交互 @ 200		0.10 ~ @ 250		
		0.10 ~ @ 200		0.10 ~ @ 250		
S4	150	0.13, 0.10 交互 @ 200		0.13, 0.10 交互 @ 200		
		0.13, 0.10 交互 @ 200		0.13, 0.10 交互 @ 200		
CS1	120	0.13, 0.10 交互 @ 150		0.10 ~ @ 250		
		0.10 ~ @ 150		0.10 ~ @ 250		
CS2	150	0.13 ~ @ 150		0.10 ~ @ 250		
		0.10 ~ @ 150		0.10 ~ @ 250		
CS3	250	0.13 ~ @ 100		0.10 ~ @ 250		
		0.10 ~ @ 150		0.10 ~ @ 250		

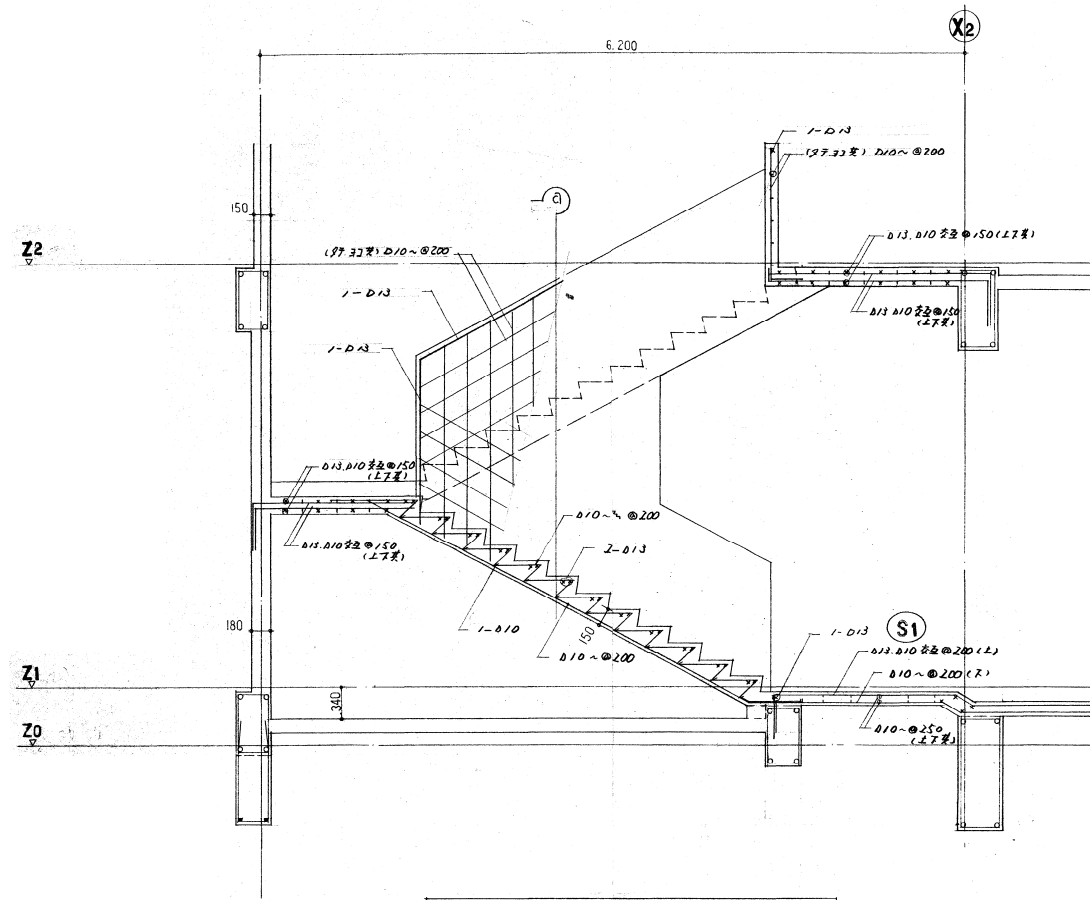


(S1) 床版配筋詳細図 S=1:30

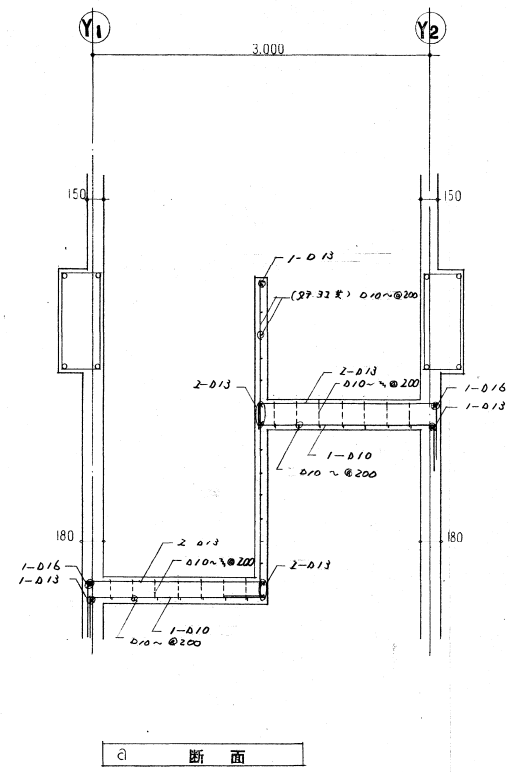


(S4) 床版配筋詳細図 S=1:30

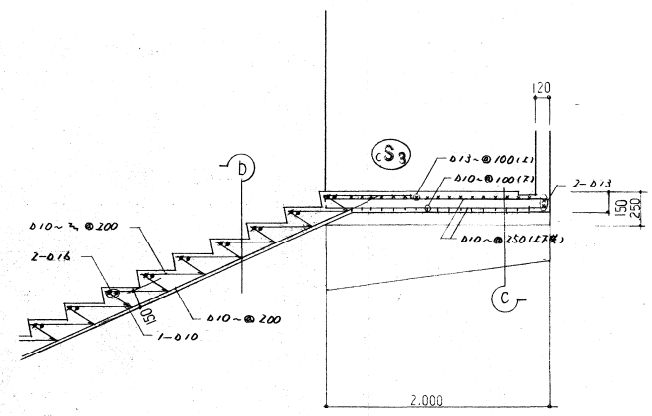
46-28



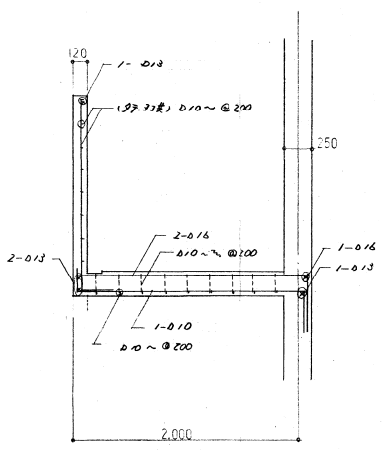
階段部 断面 a 部分詳図 S=1.30



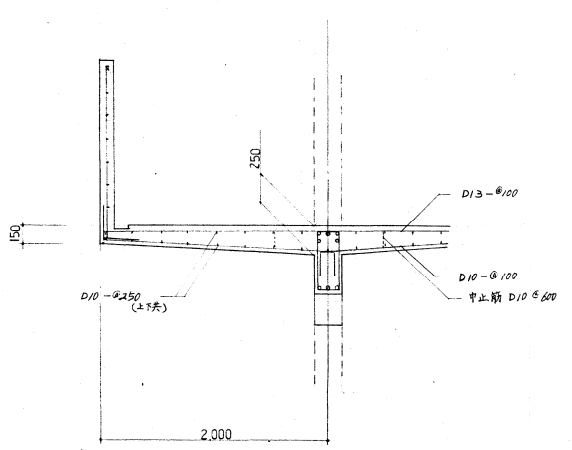
a 断面



2人階段部 断面 b 部分詳図 S=1.20

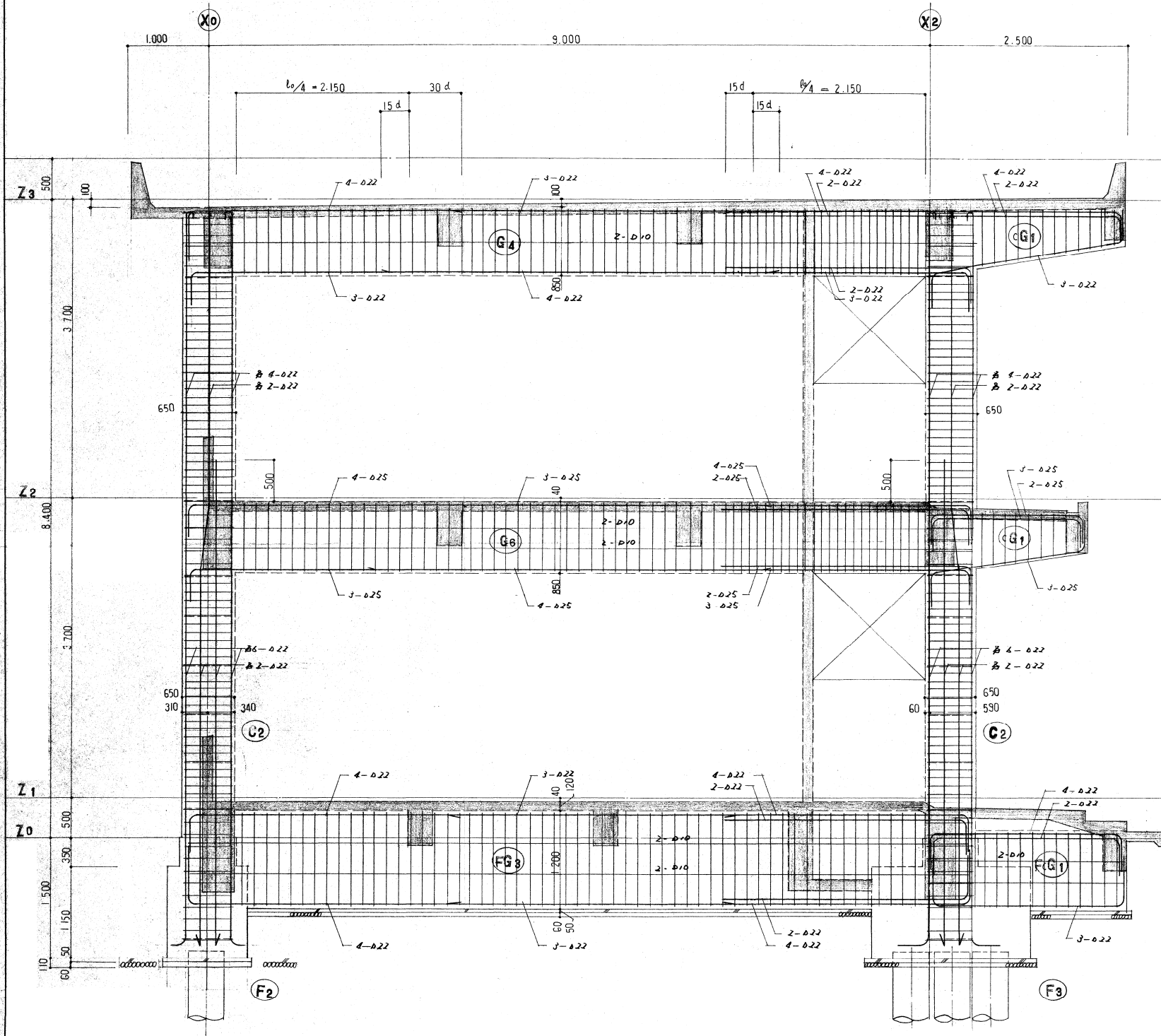


b 断面

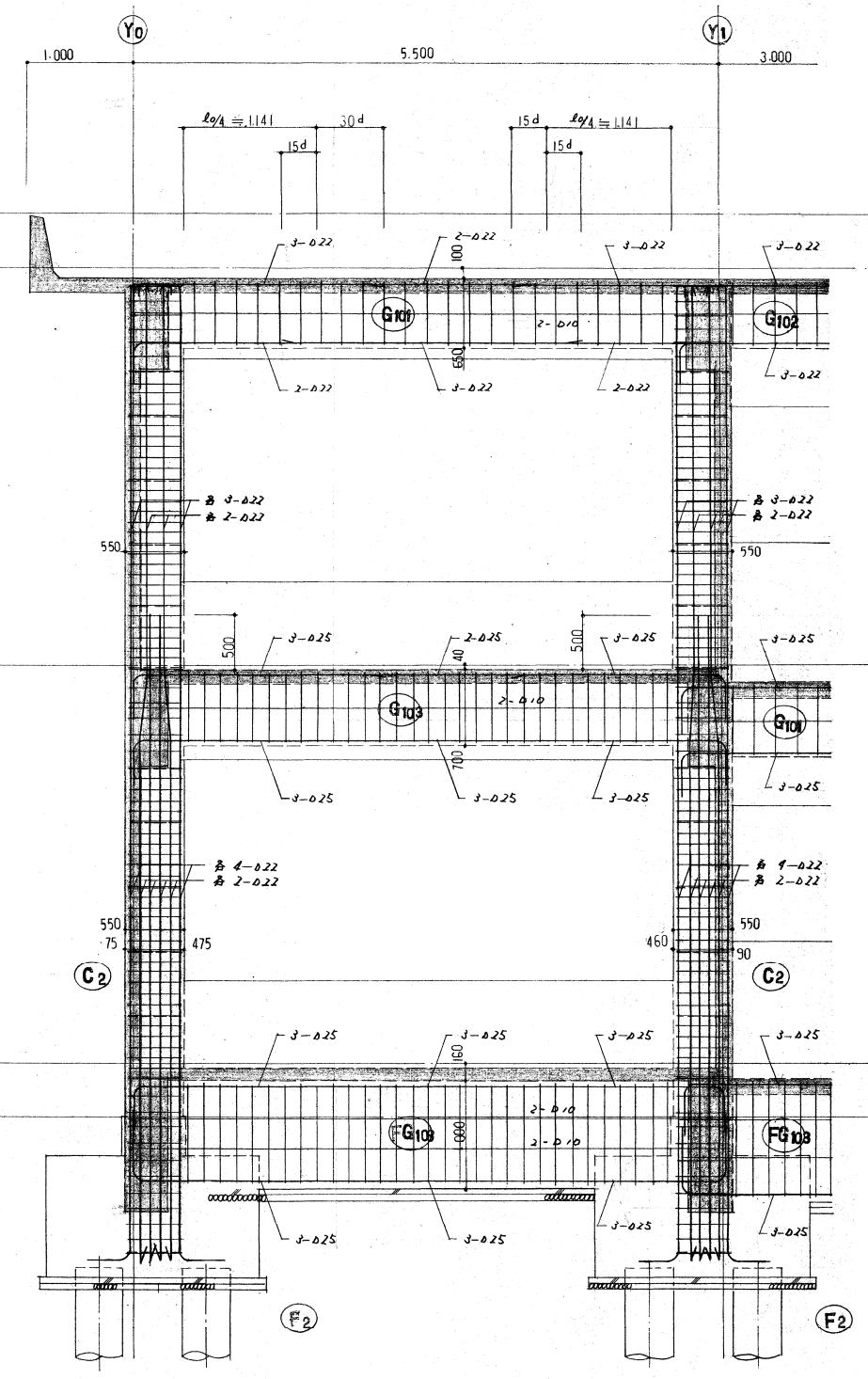


c 断面

46-2a

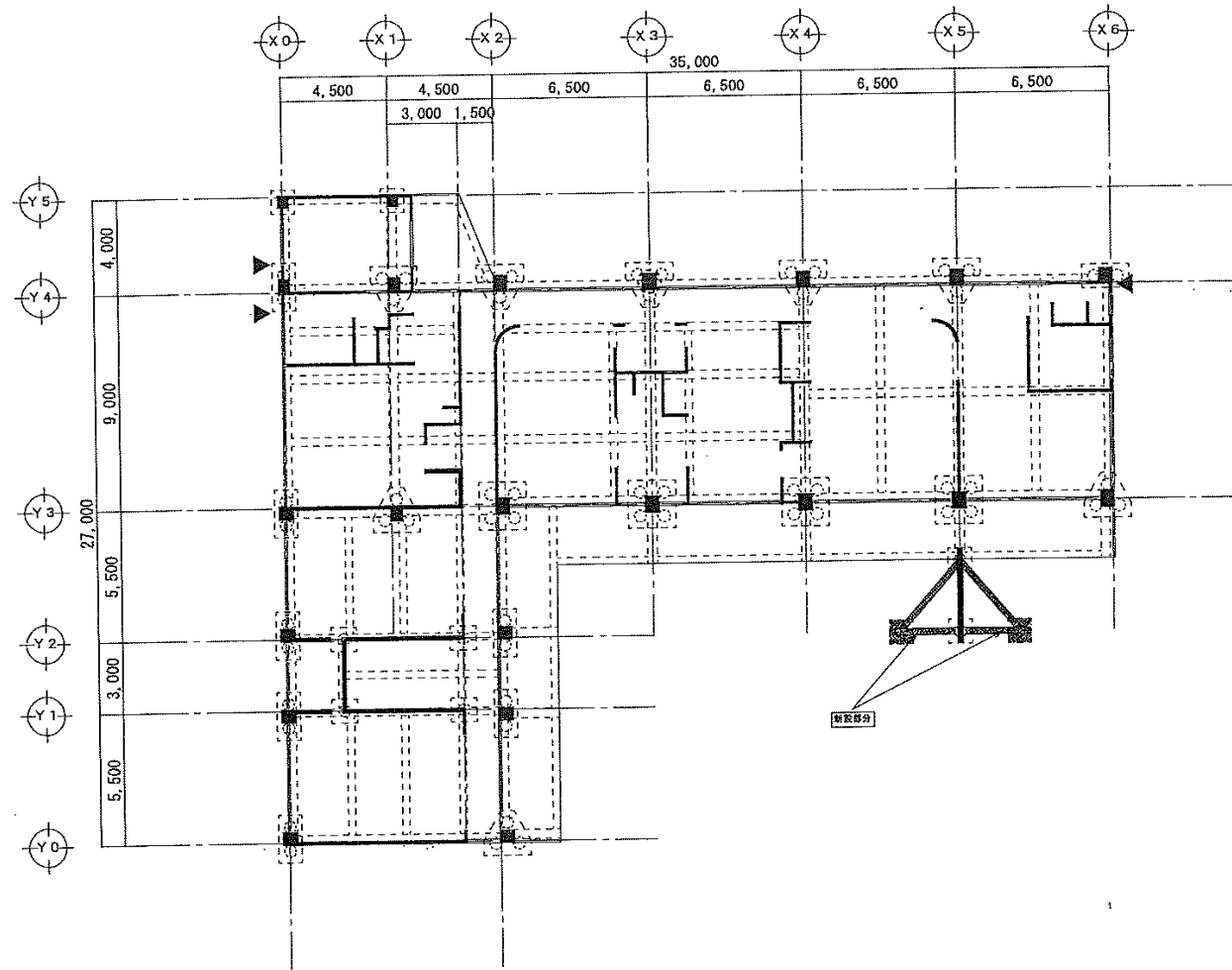


(X0) 通り配筋詳細図 S=1.30



(Y0) 通り配筋詳細図 S=1.30

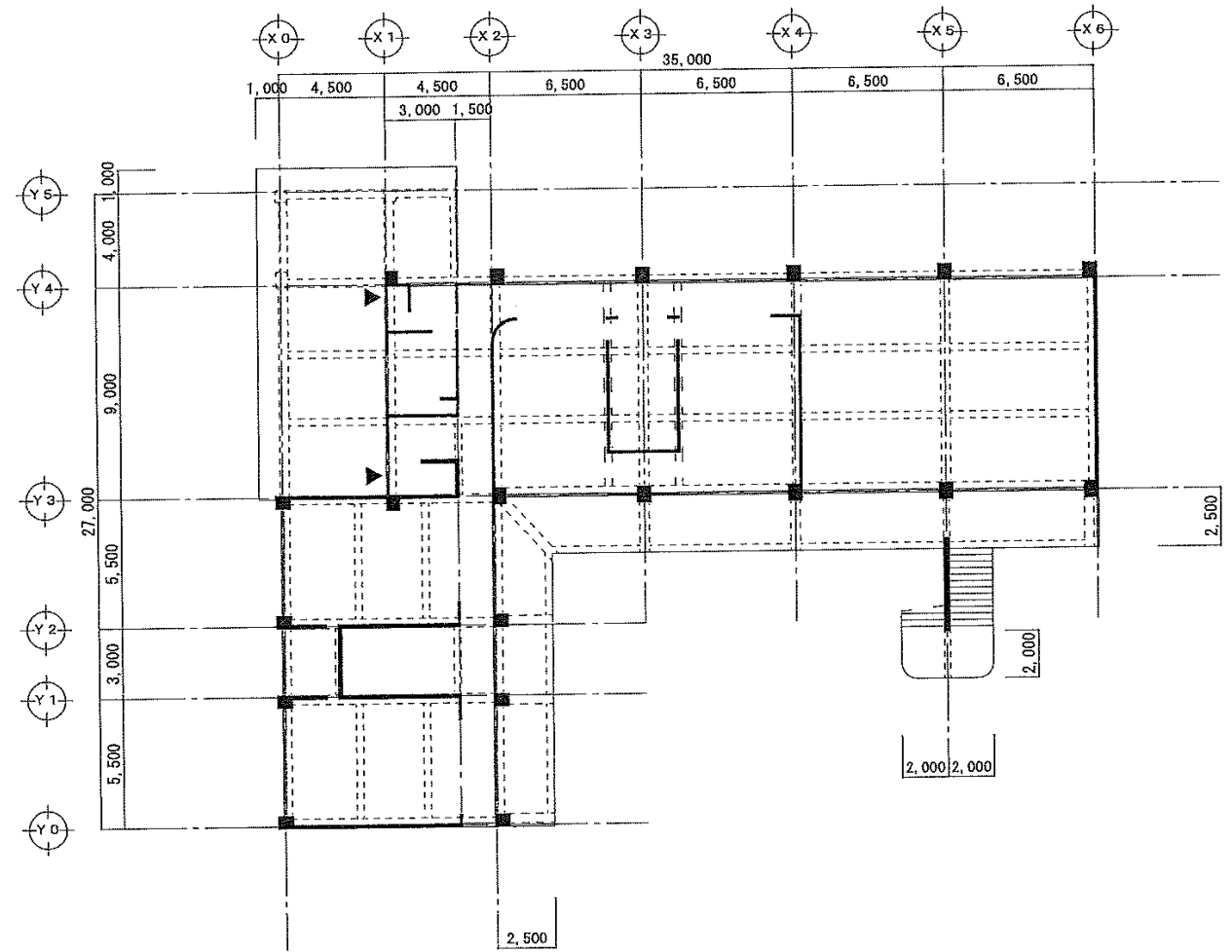
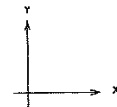
補強伏図(スリット位置)



基礎，1階伏図 1 / 200

(スリット3ヶ所)

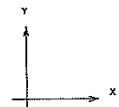
◀ はスリット位置を示す



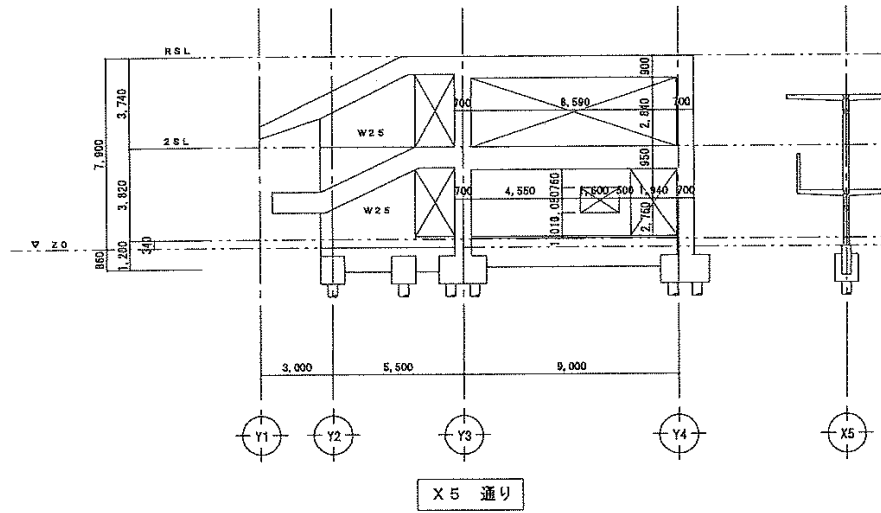
2階伏図 1 / 200

(スリット2ヶ所)

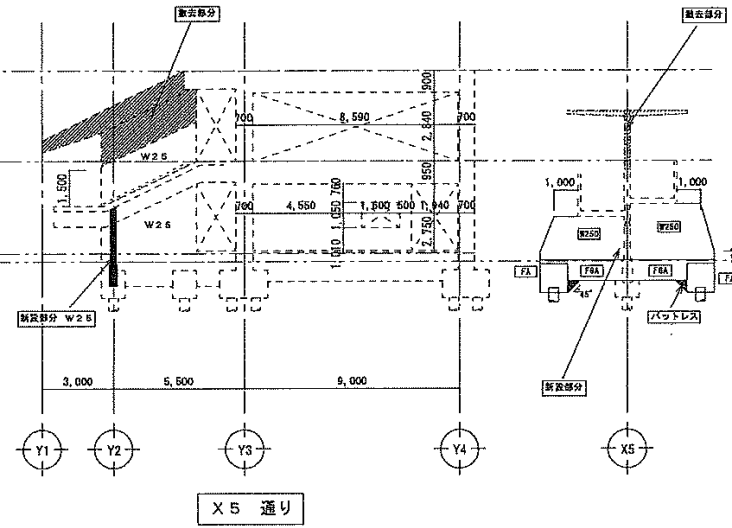
◀ はスリット位置を示す



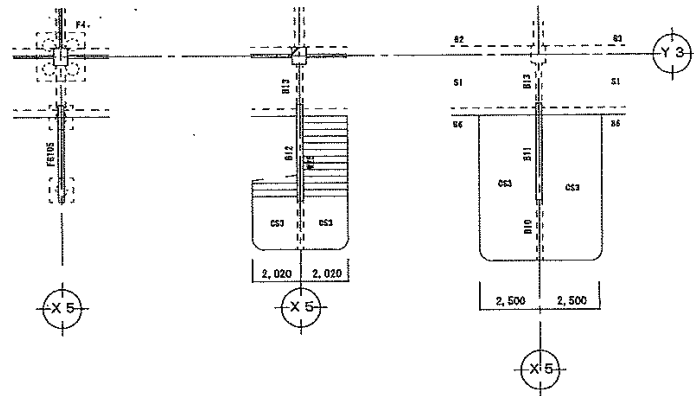
補強前軸組図 1/200



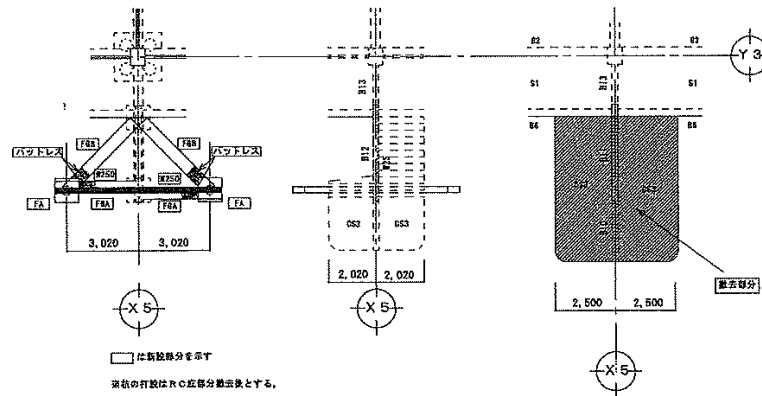
補強軸組図 1/200



補強前伏図 1/200



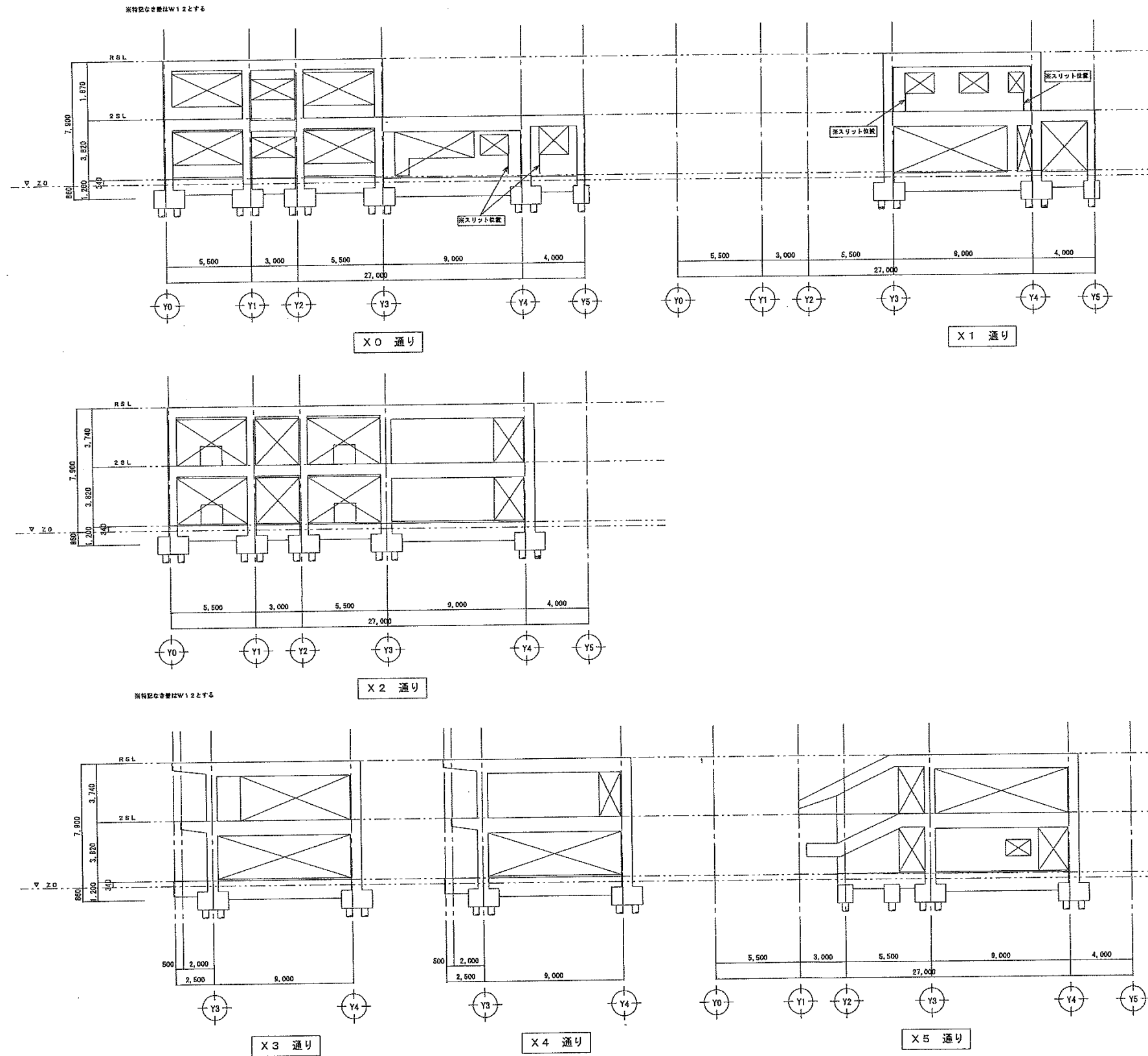
補強伏図 1/200



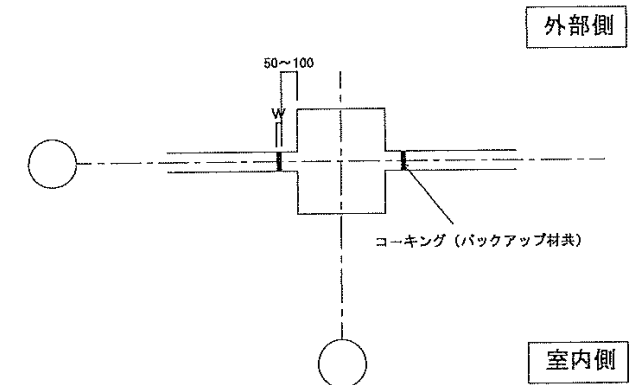
特記事項

1. 鉄筋SD295A (D16以下), SD345 (D19以上)
コンクリートFC=24N/mm²
2. 特記なき量はW2.5とする
3. 特に図示なき場合は 建設大臣官房官庁営繕部監修
「建築工事共通仕様書」 最新版に依る
4. 基礎 (近隣ボーリングデータより)
根固め拡底工法 (NEWニードリング工法)
杭先端GL-28.1m (支持層 砂礫層)
φ=450 (DM1056+MS-h1105) Ra=660KN/pile
[(A-D22-8+A-4)+A-15]
(尚, 施工に際し, 杭径, 杭長, 支持層を確認する事)

補強軸組図(スリット位置図)

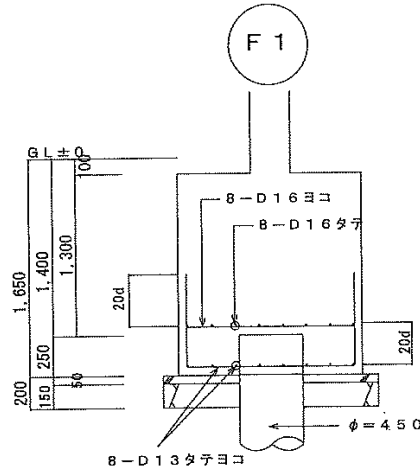


スリット要領図 1/30 完全スリット

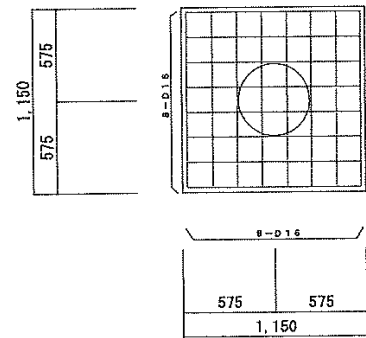
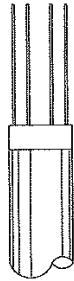


W: 30mm以上かつ二次壁高さの1/50以上とする。
 本意物のスリットは完全スリットとする事。
 (リニールスリット<ノンピック工法>(株)ロンピックジャパン)と同等とする。
 鉄筋は切断してはならない。
 スリットにかかわるサッシュ付近のコンクリートは入念に撤去する事。

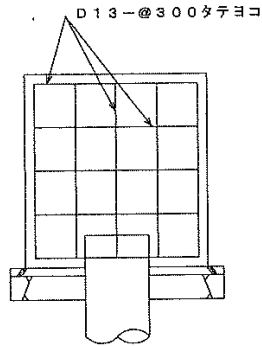
基礎 リスト 1/30



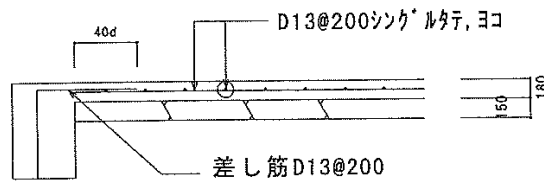
※杭頭部詳細
 その他詳細はNCPアンカー
 杭頭接合部仕様により、設計監理者の承認を得る事
 NCPアンカー
 長さは標準とする。
 φ450
 7-D22



カゴ筋 配筋図



土間コンクリート 1/30

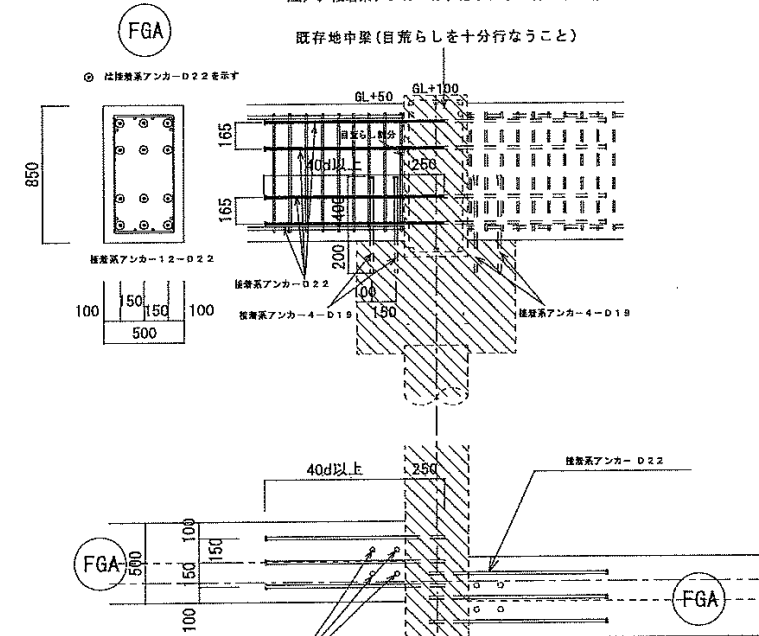


地中梁 リスト 1/30

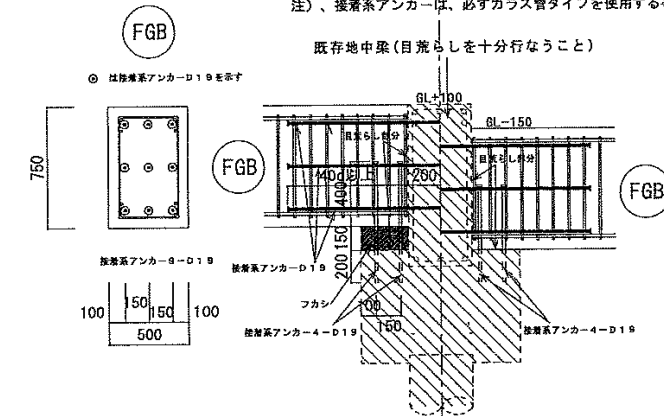
1. 特記なき腹筋は2-D13とする。
2. 巾止め筋はD10@1000とする。

	FGA	FGB
位置	全断面	全断面
断面	GL+50	GL+100 (GL-150)
B×D	500×850	500×750
上端筋	6-D22	6-D19
下端筋	6-D22	6-D19
STP	D13-@100	D13-@100

FGA 既存地中梁との取り合い
 注) 接着系アンカーは、必ずガラス管タイプを使用する事
 既存地中梁(目視らしを十分行なうこと)



FGB 既存地中梁との取り合い
 注) 接着系アンカーは、必ずガラス管タイプを使用する事
 既存地中梁(目視らしを十分行なうこと)



外階段後打ち壁詳細図 1/30

